

選択集通津録講読

・著者…慧雲(1730-1782)深諦院

解題…本書は玄談に自叙する如く、安永己亥(師時に五十歳)の夏、通津専徳寺に講演せる筆録なり。通津の題名即ち茲に取るか。玄談の終わりに末疏を叙して西山派に八部、鎮西派に八部、今家に五部を掲ぐ。即ち是等の諸註を咀嚼し、正すに日溪(法霖(1693-1741))昨夢(僧樸(1719-1762))二師の宗学を以ってす。特に玄談の一篇は文義優麗、他人の企及すべからざる特色を存す。

(メモ)

- ・1780年の夏(六世…超応「天明二年1782・本堂上棟」が75歳)
- ・末疏…西山派8部、鎮西派8部、真宗5部を「法霖(1693-1741)」と昨夢(僧樸(1719-1762))二師の宗学で正す。
- ・底本…仏大
- ・参照…六条法光寺本(法本)(京都市下京区東松屋町840か)

【科段①（玄談）】（真全 第十八卷 三九三頁）

五門

- 一に興由を明かす③
  - 一に正しく縁起を述べ
  - 二に製作年代
  - 三に異本を弁定す
- 二に綱要を弁ず⑤
  - 一に積名
    - 一に今家の正義を述べ
    - 一に離積（選択・本願・念仏・集）
    - 二に合積
    - 二に他流の異説を弁ず
  - 二に出体（||南無阿弥陀仏）
  - 三に明宗（||往生之業念仏為本）
  - 四に弁用（||断疑生信往生成仏）
  - 五に判教（※全段）
- 三に所依を弁ず
  - 一に經典
    - 一に傍依
    - 二に正依
  - 二に師説
    - 一に傍依
    - 二に正依
- 四に弘伝を弁ず④
  - 一に付属
    - 一に自家相承
    - 二に他家相承
  - 二に翼讚（傍讚嘆）
  - 三に破斥
  - 四に末流
- 五に文に随いて釈す←科段②へ

安永己亥の夏、俊靈・礼讓諸子の請に応じ、この典を通津専徳寺にて講ず。すなわち一時の講話を録すは左のごとし。まさにこの典を講ぜんとするに、五門分別あり。

**一**に興由を明かす。**二**に綱要を弁ず。**三**に所依を弁ず。**四**に弘伝を弁ず。**五**に文に随つて釈す。

初初の興由とは、これまた三となす。**初**に正しく縁起を述ぶ。**二**に製作年代。**三**には異本を弁定す。

**初**に正述とは、すなわち『集』下の後述の文これなり。その中に云く、

「しかるにいま図らざるに仰せを蒙る。辞謝するに地なし。よりていまなまじひに念仏の要文を集めて、あまつさへ念仏の要義を述ぶ。ただし命旨を顧みて不敏を顧みず。これすなはち無慚無愧のはなはだしきなり」等と。(一・一三二一八)

また「化土卷」に云く、

「『選択本願念仏集』は、禅定博陸の教命によりて撰集せしめるところなり。真宗の簡要、念仏の奥義、これに撰在せり。見るもの論り易し。まことにこれ希有最勝の華文、無上甚深の宝典なり」と。

師の徳は一時を貴び、化は朝野に遍ず。東なく西なく、思服せざることなし。中において禅定博陸＊はその最なり。『和讃』に云々。また『法要』二七(四十二紙)『拾遺古徳伝＊』六に云々。(聖人あるとき月輪殿に参じて、浄土の法門閑談数尅、座をあたためられて退出のとき、禅定殿下、庭上にく

＊禅定博陸…九条兼実

＊拾遺古徳伝…覚如が制作した絵巻物。33歳。真宗の立場からの法然伝記。

「拾遺」とはそれまでの法然伝に漏れていた事績を補うということで、親鸞に関する内容が織り込まれている。

つれおりさせたまひて稽首礼拝等云々)。かつ諸伝(『絵詞伝』十一、『要義鈔』等)に依りて云く、

「建久九年正月朔(師の時六十六)、自ら禁止して他適を容れず。時時に証空を遣わし、**[393b]**殿下を訪ねる(『絵詞』載なし)。殿下、思慕に勝てず、一日、藤右衛門尉重経(※しげつね)(あるいは『十六門記』)云く「対馬左衛門尉重経」。あるいは『選択伝』(および『私記』云く「藤左衛門尉重経」。あるいは『見聞』)云く、「対馬前司重俊。あるいは(『鵜木』)云く、対馬守重経入道。あるいは(『九卷伝』)云く、清兵衛。今家は伝なく適従すべからず)をして師に啓せしむと云々。師は固持することあたわず。同年三月述作す。室の外人を禁ず。ただ真観・証義・証空・勘文・安楽の筆受あり(『絵詞』はただ云く、「安楽執筆」と。余事載なし)。しかるに安楽は第二章を書し竟りて云く、「吾不肖親しく選挙してこの書を執筆するを蒙る。究めて名望たり」と。師、言を聞きて、

「器量ありといえども、その心正しからず。何ぞこれを用いるに足らん」、ついに真観を命じてこれを書す。書成す。すなわち証空をしてこれを呈進せしむ」等。

**二**に製作年時とは、『法要』二十七(三十一紙)・『古徳伝』六に云く、「元久元年甲子(師年七十二)の作」と。

あるいは(『十六門記』『密要』『口筆』『決疑』『私記』『絵詞』『源流』等の説)云く、「建久元年戊年(師年六十六)の作」と。

あるいは(『私聚鈔』、智円の説)云く、建仁元年辛酉(師年六十九)の作)。

あるいは(一念義、深草義等の説)云く、正治年中(師年六十七八)の作。あるいは(正源名義の説)云く、建久八年に仮名二卷を選し、同九年に改めて漢字と為す等、已上六説なり。宜しく『法要』に従うべし。

**三**に異本を弁定するとは、義山本の跋に云く、

「これ四本あり。第一は稿本。初に三経の説時を論ず。第二は刪本。殿下に呈するものこれなり。延応元年刊行(当師滅後二十八年)。第三は

正本。建暦元年辛未、兵部郷平基親の序、**[394a]**同年壬申九月八日西山春阿弥刊行。即ち師の入滅の年。第四は広本（『決疑』五（三十七）云く、「本、広略あり。略して則ち高覧本。ある遺弟云く、広本は、執筆の人、初心の者たり。後に名目を加う。自ら小異あり。高覧本にしかず。」この中の初後二本伝わらず。今伝わる所は建暦延応二本のみ。」

**二**に綱要は、これ五重あり。**一**は積名。すなわち題号これなり。**二**は出体。すなわち題下の六字これなり。**三**は明宗。すなわち来註八字これなり。**四**は弁用。すなわち三心章中の断疑生信の文これなり。**五**は判教。全部十六章段みなこれ。

何らか**積名**。**初**に今家の正義を述す。**次**に他流の異説を弁す。

**初**に正義の中、**初**に離積。**次**に合積。

**初**に離積に四。**初**に**選択**を積す。**二**に**本願**を積す。**三**に**念仏**を積す。**四**に**集**を積す。

**初**に**選択**を積すは、語は『大阿弥陀経』（一・一三六）及び『覚経』（一・七七）に出づ。第三章に引くがごとし。廃立の異名のみ。しかれば『集』の終わりに八種の**選択**を列す。『禿鈔』（二・一）には十六**選択**に拡充す。九難四通<sup>ニ</sup>は、別所に弁ずるがごとし。今は要を的取せば、その四重あり。聖を捨て淨に帰す。これ一重となす。「二門章」の意。雑を捨て正に帰す。これ二重となす（二行章の意）。助を傍らにして正を専らとす。これ三重となす（本願章の意）。疑を断じ信を生ず。これ四重となす（三心章の意）。かくのごとき四重、横堅具足なり。もし直入約せば、四重頓契。もし廻心に約せば四重次第なり。元祖は第三重を先とし、高祖は第四重を先とす。地の易しきは同然者なり<sup>ニ</sup>。

**二**に**本願**を積せば、経に云く「本願力故」。論に云く「本願如是」。あるいは云く「観仏本願力」と。本はすなわち因本。いわゆる本法蔵菩薩の四十八願これなり。これに**[394b]**総別あり。総はすなわち四十八願。別はすなわ

\***八**選択と十六選択に、九の難と四の通があるということか（十六選択には九つのオリジナルと、4つの共通点（選択本願、選択讚嘆、選択証誠、選択撰取）がある。加えて3つの似た語がある）。

\***ニ**意味不明。「易レ地同然者也」とある。

ち第十八願。すなわち今の所明なり。さらに深義あり。五願六法なり。具さに『文類』『禿鈔』等に判ずがごとし。

三に念仏を積せば、称南無阿弥陀仏なり。念称是一。下(本願章私積本(二十七左))の自積のごとし。観念および理事等を簡ぶ故に。『一紙法語』のごとし。

四に集を積せば聚なり。『安樂集』に云く、「真言を採り集めて助けて往益を修せしむ」と。『集』の下に云く、「念仏の要文を集めて」と。今謂く、諸文を類聚しもつて書目となすのみ。

次に合積は、「選択本願念仏」の「集」なり。依主を義となす。上六は所聚、下一は能聚、能所合称するが故に、しかりと云うなり。

また上六の中について、順逆簡別<sup>二</sup>あり。その逆簡とは、別をもつて通を定む。いわく「念仏」とは何色物なるや<sup>三</sup>。観念にあらず、理持(※事か)にあらず。ただこれ口称なり。ゆえに「本願」をもつて能別の言となす。「本願」とは何色物なるや。これ通総にあらず、横超別異の故に、「選択」をもつて能別の言となす。

『文軌』の中(五)に、「弥陀仏本願念仏」を積して云く、

「問う、「弥陀仏本願念仏」は簡別の言に似る。他仏また称名本願あるや。

答う。これあり。今しばらく一二を出す。已下、『七仏本願功德経』上による(二紙)。

(一) 吉祥王仏の本願名号のごとし。称念これは病苦消除、鬪訟解散、諸悪獣等の難を脱す。

(二) 法界仏の名号のごとし。杻械枷鎖鞭杖極刑の諸有の厄難を免脱す。

(三) 宝月仏の名号のごとし。衣服飲食資生の具、金銀珍宝、願に随い充足し、および女人の臨産の苦惱等を解脱す。

しかるに弥陀仏の本願念仏は[395a]、人天の福樂を与えんために設け

\*簡別…えらびわけること。區別すること。(参照)「わが同行ひとの同行と簡別して、これを相論する、いはれなき事」『改邪鈔』p.925

☆原文は「念仏何色物」。

しの念仏にあらず（意は祈現者を戒む）。また衆生をして余善の力を雑え相い共に浄業を成じ、往生已後、歴劫して成仏せしめんと欲するの念仏にあらず（意は雑行雑修の人を戒む）。また行者をして身心を苦励し積累多念して、この自力の修因をもつて方便土の果報を得しめんと欲するの念仏にあらず（意は自力念仏の人を戒む）。ただ聞名信喜すればすなわち定聚に住し、次生に必ず滅度に至らしむるの念仏なり（吉水のいわゆる第十八願。高祖のいわゆる第十七願）等。

まさに知るべし、阿弥陀仏の選択摂取せらるるの本願所成の念仏なり。その簡を須ある（※すべからく簡ずべき）は自ら総の別、謂く選択の義。広く八種及び十六種等に亘る。

次に本願と云うは、別を挙げて総を撰するなり。本願はなお広く教信証に亘る。故に次に念仏と云う。すなわちこれ第十八願所成の他力の大行これなり。高祖は大行をもつて第十七願に属するは、別して義門あり。別処に弁ずるがごとし。

まさに知るべし、選択中の本願、本願中の念仏なり。またまた上六を別となし、下一を通となす。その旨知るべし。

次に他流の異説を弁ずれば、『徹選択』（鎮西義、弁阿云く）はこれに三義あり。

第一に念仏とは、これ諸師所立の口称念仏なり（弁じて曰く、「簡」等と云うはすなわち可なり。直指は大いに非なり）。

第二に本願と云うは、これ善導所立の本願念仏なり（弁じて曰く、あに善導に止む。七祖みなしかり。もし撰に約せばもろの則は稍可なり）。

第三に選択と云うは、これ然師所立の選択念仏なり（弁じて曰く、「所謂」と云うはすなわち可なり。今「所立」と云うはいまだ穩やかならず。七祖あに別義あらんや。ただこれ名目の異なるのみ）。

三重の念仏の義ありといえども、ともに観念の念仏にあらず、ただこれ口称念仏なり（弁じて曰く、上来の釈義は巧に似たれども大いに非なり。三重の浅深故に。七祖の異轍故に）。

『決疑』の祖述に云く、

初めに念仏と云うは [395b] 万行随一の念仏。これ諸師所立の念仏に当る。

いまだ正雑・助正を分別せざるが故に（弁じて曰く、その失は上に准ず）。



次に「本願念仏」と言うは、万行中において正雑を分別し、正行の中において細かく助正を判ず。その正業とは称名念仏。弥陀の本願に順ずるが故に。故に雑行を止め専ら念仏を行ず。これ今家所立の念仏の義に当る（弁じて曰く、言陳（※陳言）にして害なし）。

後に選択本願念仏と言うは、本願義の上において、さらに選択の一義を加う。これ祖師上人、『大阿弥陀経』によりて、しかして始めてこの義を立つるなり。いわゆるその本願とは、二百一十億の諸仏願行の中、選択する所の本願なり（弁じて曰く、「更に判ず」と言うはすなわち可なり。今「更に加え、始めて立つ」と言うは、決して祖意にあらず）。

しかれば今集の中、備えて三義を存ずるにあらず。三義相成し、ただ一義となす。念仏はただ念仏にあらず、そなわちこれ本願念仏。本願念仏とはただ本願念仏にあらず、すなわちこれ選択本願念仏なり。

およそ念仏とはあるいは観、あるいは称、あるいは総、あるいは別。ただこれ念仏は、恐らくこれ濫る。故に「本願念仏」と言うのみ（弁じて曰く、この説好し。「恐らく濫る」等と言うが故に）。

私に謂く、大師の本願、祖師の選択、辞は異にして義は同じ（弁じて曰く、この説大いに好し）。

上来の二釈、旨を得て取り来る。逆簡の義にあたり、また『要義』（西山竹林寺の義）に云く、

およそこの題に三重の意あり。謂く念仏の言、広く観称事理等に通じ、今すなわち称名の念故に、簡んで本願をもつてして称名念仏、またこれ万行随一の類に似る。故に簡んで選択をもつてこの三重の逆、次に「第一」等を配定す（弁じて曰く、この釈大いに好し。「簡んでもつて類に似る」等と言うが故に。この三已下「我れ視の一簡」より家言のみ（※?）。しかるに他師の選択の二字、作者につきて解す。何となれば他流の諸行本願義、その意[396a]を云えば、諸行念仏はともに仏の本願。二類ともに生ずといえども、今願主の請いに酬いて、単に念仏の要文を集む。故に「選択」と云う（弁じて曰く、これ九品寺の覚明の義を指す。背轍を知るべし。また選択をもつて集主に属するは経釈並に通ぜず）。

また諸行非本願義を立てるものありて、またこれ二類往生を許す。その意に云く、「仏願とは総別の乗。別願とは念仏得生。総願被摂とは、



余行また往く。選択の義、また先に弁ずるがごとし（弁じて曰く、これ鎮西義を指す。別願何の功あり。その失見るべし。ただ「先」等のごときは、この釈何に拠る。上の二疏と異なる失なり）。

しかれば西山義のごときは一類往生。『密要』に云く、

専ら往生のために三業を修すれば、皆これ念弥陀。故に渾じて念仏と名く。

また私記及び要義の意に云く、

西方に生ぜんと欲すれば、まづその仏に帰すべし。その仏に帰すれば後に諸の行門に入る。行行みな念仏を成ず。

これはこれ傍正開会の義なり。大いに初をもつて正なすの旨を失す。廢立をもつて初門となし、傍正をもつて終極となすが故に。鎮西は文を追いて義を失す。西山は義に随いて旨を失す。並んで果に真仮の差あり、因に二力の別あることを知らざるに座すものなり。具に別弁のごとし。

何らか**出体**。南無阿弥陀仏これなり。

体に二義あり。能詮と所詮。讚偈録のごとし。

今、所詮に約せば、体宗同異す。安永録のごとし。あるいは同あるいは異。今、異義に約せば、同義なきにあらず。

体とはこれ何。所謂（玄義（二十八）八上（云々）、「一部」の旨歸。衆義の都会する所」と。「一部」とは今集の一部。「旨」は謂く指示。「歸」は謂く帰趣。その指示する所は、ただ嘉号にあり。その帰趣する所もまた嘉号にあり。「衆義」とは十六章段の一一の所詮。「都」は謂く都聚。「会」は謂く会同。その都**[396b]**聚會同する所、またこれ六字にあるのみ。

故に云く三心これ南無阿弥陀仏、四修これ南無阿弥陀仏に等し。准知して章章の所詮、また惟是（※「これこれ」か）のみ。これに舒のばせば一部に亘る。これを巻けば六字に帰す故に。何をもつてこれを証する。『論註』に三部の經体を明かして云く、「仏の名号をもつて經の体とするなり」と。「教卷」にまた言う。准知して今集まず体を挙ぐるものなり。讚偈は初めに嘉号を安ず。すなわちその例なり。ただかの讚嘆を主とす。故にただ体を挙ぐ。

これ教相を主とし、故に体宗ならべて挙ぐのみ。『文類』のごときは巻巻の初にただ宗致を挙ぐ。教相は宗を主となすが故に、六字の名義、玄義録のごとし。今は略してこれを釈す。「玄義」(十九丁)に云く、「南無と言うは(乃至)必得往生」と。行巻(二十五右)に云く、「しかれば南無の言は帰命(止)、金剛心成就の貌なり」と。

この六字、南無を全うじての阿弥陀仏。またこれ阿弥陀仏を全うじての南無。願行一具、機法一体のものなり。原もとそれ西方の善逝、光寿別徳、利益窮まりなし。すなわちこれ安養自然の妙果、依正不二、主伴同体、またこれ十方撰化の根本。名体不二、徳をもつて名に施す。諸仏の称揚するところ、衆生の所受の行、職此の由(※?)、五願六法、理在知るべし。四字これ所謂(証か)法体(自然妙果)、二字これ能証の真因、撰化の根本。能所不離、因果相即、不可思議の至こゝの者なり。あに一部の指帰、衆義の都会にあらずや。また可なり。この六字、上を成じて下を統す。『六要』五(十三紙)に讃偈を釈して云く、

題後文前、六字の名を安ずは何の意ありや。

答う。[397a]題目は「讃阿弥陀仏偈」に云うといえども、いまだ名号功徳を讃嘆することを顕さず。ただこれ讃嘆。このゆえに言う所の讃嘆は名号の徳にあることを示さんとする。かくのごとき題か。『選択集』の初に、まず名号を安じ、宛はこの例を由し、彼の觀念と称仏の名号等を簡異せんとするなり。

今謂く成上の義は文に親し。統下の義は義に親し。故に統下をもつて主となすのみ。『結疑』一(五紙右)に云く、

問う。始めにこの字を置くは、何の要あるや。

答う。伝に云く、これ題下の念仏及びもつて文中の勧める所の念仏、俱にこれ口称を顕す。これすなわち觀念を簡異し、口称を表知し見易からしむるなり(弁じて曰く、皮を得る)。

問う。題後文前に、この字を置くその例あるや。

答う。鸞師の『讃阿弥陀偈』、今のごとくまた「南無阿弥陀仏」と云う(弁じて曰く、好し)。『薩遮尼乾子經』の文首、また「帰命大毘盧遮那」と云う。『正法念經』また「帰命一切諸仏菩薩」と云う。その例一

にあらず（弁じて曰く、二門の義別。例同すべからず）。

『要義』に云く、

七字の首題、玄義の南無六字に倣い、「先勸」等の九字、「往」等の八字、また十四行偈、二門章の標序題等を象するなり（弁じて曰く、牽合附会にして依用すべからず）」と。乃至（云々）。

全く『結疑』と同じ。今謂く、他流の釈義、短偈にして脛を覆わざるもののみ。『徹選択』（無文。恐らく誤。『私集鈔』一（三））云く、「六字は帰敬序。八字は発起序」と。また『聞香』に云く、「初の六字は正しく帰敬を明かす。後次の八字は帰敬の意等を示す（弁じて曰く、迂遠甚し。いわんやまたその義相類せずか）」と。

何らか宗を明かす。「往生之業 念仏為本」これなり。

宗は謂く宗致。所謂（玄義九丁（云々））修行の喉襟。頸体の要徑。

修行とは修習受行、能修の相なり。能修[397b]の念仏において身体の喉あり、衣服の襟あり。故に喉襟と云う。

頸体とは、一心専念、名号の体徳を頸明するなり。要徑とは、肝要捷徑。何をもって証する。集下（末三十三右）の文に八種の選択を列しおわって云く、「故に知りぬ、三経ともに念仏を選びてもつて宗致となすのみ」と。

教巻の説に「如来の本願をもって経の宗致となす」と。

問う。念仏本願の同意いかん。

答う。本願はこれ能成。念仏はこれ所成。同異云うか。故に云く、名号はこれ本願、本願はこれ名号。しかりといえども義の差別に随えば同異なきにあらず。『文類』のごときは詮ずる所、五願六法なるが故に、本願の言、意は六法に通ず。所謂十一、十二、十三、及び十七、十八なり。今集のごときは詮ずる所、正しく大行一法に在す。故に直して念仏と云う。所謂（※本願の言、）第十八の一願なり。

「往生」等とは、具さに往生浄土の正定の業を云う。

「念仏」とは、すなわち「称無碍光如来名」なり。

「為本」とは、一つは為先と作す。『大学』に云く、

物に本末あり、事に終始あり。先後する所を知らば、すなわち道に近し。

今また准解す。

本は法本に約す。先は受行に約す。言異にして旨同。ただ今家は為本を用いる。文類の所引に依るが故に。

按ずるにこの八字は『要集』中末、「要行を決す」の文において出づ。三輩章の私釈引用する故に。

問う。高祖は常に信心為本を言う。あに鉾楯か。

答う。所望不同にして、理実互通なり。これに二意あり。

一は二行相望。謂く念仏を本となし、諸行を末となす。今集はこの義に依る。行巻もまたこの義あり。文に云く、

称名はすなはちこれ最勝真妙の正業なり。正業はすなはちこれ念仏なり。  
念仏はすなはち [398a] 此れ南無阿弥陀仏なり。南無阿弥陀仏はすなはち  
これ正念なりと。

また念仏諸善比較対論。四十八対これはこれ念仏為本の義なり。

二は行信相望。謂く信心を本となし、称名を末となす。高祖は常にこの旨を談ず。信巻に云く、

真実の信心はかならず名号を具す。名号はかならずしも願力の信心を具せざるなり。

また云く、「真心を根本とす、邪雑を錯とす、疑情を失とするなり」。  
今集にまたこの義あり。三心章に云く、

生死の家には疑をもつて所止となし、涅槃の城には信をもつて能入となす。

これまた信心為本の義なり。

問う。理実互通ならば、施設なんぞ異なる。

答う。これ二由あり。一は所対異なる故に、二は時縁別なる故に。

初の所対の異とは、集主は外の聖道門に対して念仏宗を立つ。故に念仏為本と言う。高祖は内の念仏人に対して決定心を勧める。故に信心為本と云う。

これを異となすのみ。

二に時縁の別とは、集主は初開の時に当り、理は宜しく外に對してその基を建つべし。高祖は後述の時に當り、理は内に對してその法要を授けるべし。これを異となすのみ。人はこれに達せず、念仏為本の言を聞いて、ただ単行を勧めるとし、信心為本を聞いて、すなわち銚楯と謂う。文を追って義に暗し。何ぞ言に足るか。問う。

……（以下、未入稿）……

[398b]

三に所依とは、この中に二あり。初は經典、二には師説。

……（以下、未入稿）……

[399a] [399b] [400a] [400b] [401a]

四に弘伝とは、この中に四となる。初は付属、二は翼讚、三は破斥。四に末流。

初の付属とはまた二となす。初に自家相承、二に他家相承。

初の自家とは、「化卷」に、

……（以下、未入稿）……

[401b] [402a] [402b]

[403a] 選択集通津録卷一

芸洲報專 慧雲著

二に別頭自十六。

初に二門章

二に二行章

三に本願章

- 四に三輩章
- 五に利益章
- 六に特留章
- 七に光摂章
- 八に三心章
- 九に四修章
- 十に化讚章
- 十一に約対章
- 十二に付属章
- 十三に多善章
- 十四に証誠章
- 十五に護念章
- 十六に慇付章

【科段②（随文釈）】

初に二門章③

初に標章

二に引文③

初に二門を標挙す。

二に行蔵を顕示す②

初に聖道の廃退③

初に難証。

二に明由。

三に引証。

二に浄土の興隆…初は易入。二に引証

三に応不（※応機と不堪）を勤励す③

初に総。

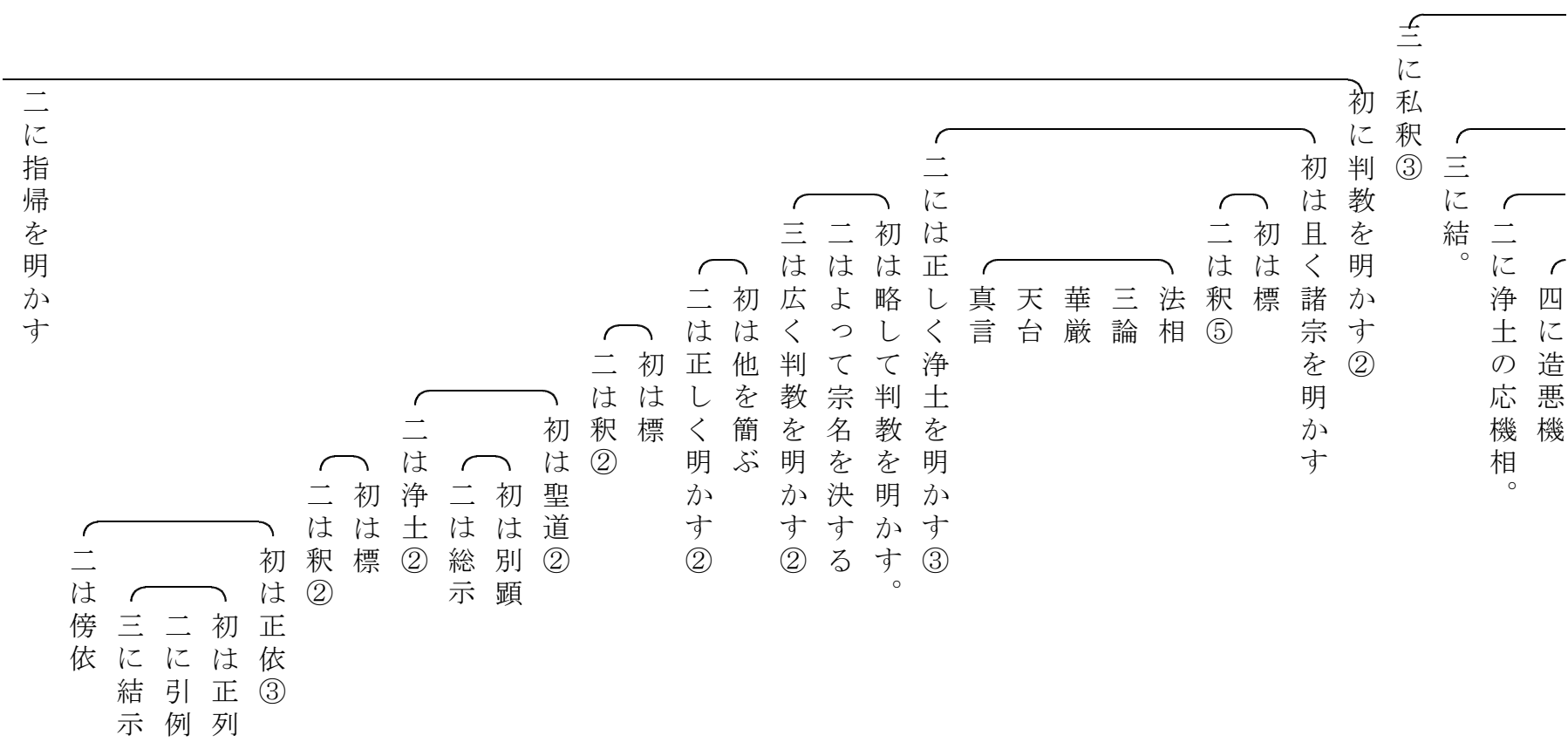
二に別②

初に聖道の不堪相④

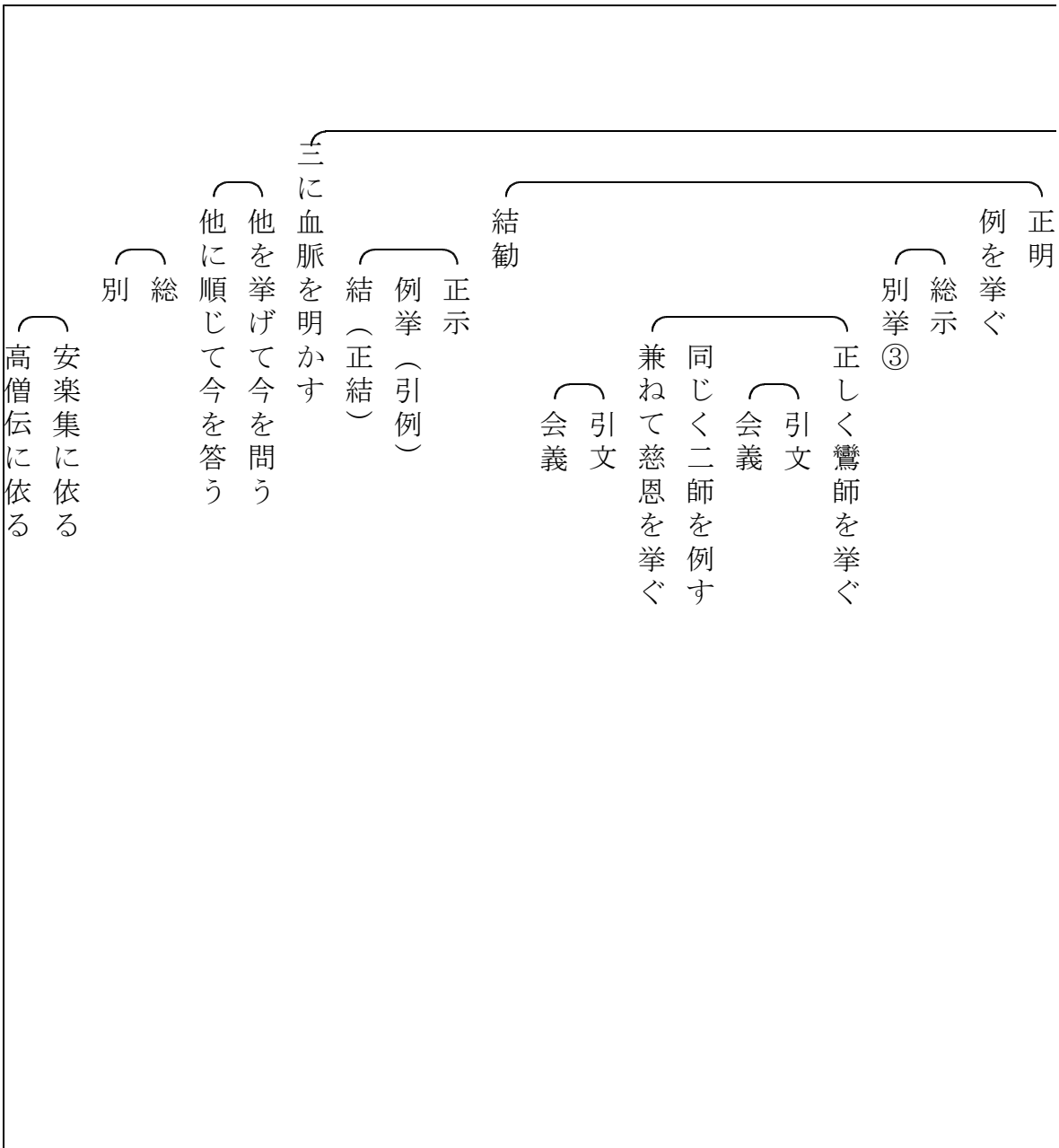
初に遇大機。

二に遇小機

三に世善機







初に標章。二に引文。三に私釈。今は初。

### 道綽禪師<sup>止</sup>浄土之文

（道綽禪師、聖道・浄土の二門を立てて、聖道を捨ててまさしく浄土に帰する文。）

問う。十六章の段、生起あるやいなや。  
 答う。これ二途あり。一は文に約す。二は義に約す。  
 いかんが文に約す。初の二は師に依る。第三已下は経に依る。  
 師に依る中に二あり。初は西河に依り、次は終南に依る。師資相承の故に。

經に依る中に三あり。第三より第六に至るは大經の文に依る。第七より第十二に至るは觀經の文に依る。第十三より終りに至るは小經の文に依る。

いかんが義に約す。『行卷』に『集』の二文を引く。すなわち宗致を尽くす者なり。ここによりてこれを觀ぜば、初の二はすなわち本願章の楷梯となすなり。故に総結の文に云く、

「それすみやかに生死を離れんと欲はば、二種の勝法のなかに、しばらく聖道門を闔きて、選んで浄土門に入れ。」

これ第一章を結勸するなり。また云く、

「浄土門に入らんと欲はば、正・雑二行のなかに、しばらくもろもろの雑行を抛ちて、選んで正行に帰すべし。」

これ第二章を結勸するなり。また云く、

「正行を修せんと欲はば、正・助二業のなかに、なほ助業を傍らにして、選んで正定をもつばらにすべし。正定の業とはすなはちこれ仏の名を称するなり。称名はかならず生ずることを得。仏の本願によるがゆゑに。」

これ第三章を結勸するなり。すでに第三章を明かし、すなわち所詮の宗致、究竟備足するなり。宜しきかな題号は「選択本願念仏」なり。

第四章のごときは、念仏の機、ひろく三類にわたり普く衆機を益すること、を助顯するなり。

第五章のごときは、念仏の徳、無上大利にして八万四千の小利有上の比にあらざること、を助顯するなり。

第六章のごときは、念仏の澤、像末法滅の極劣の機を悲引することを助顯するなり。

第七章のごときは、仏の心光、余の雑業の行者を照らさず、ただ念仏の行者ありて、独り摂取の大益を蒙ることを助顯するなり。

第八章のごときは、信行不離の旨を助顯するなり。

第九章のごときは、念仏の行者、恭敬無余にして自具の益を助顯するなり。

第十章のごときは、化仏の讚嘆を挙げ、念仏の功を助顯す。

十一章のごときは、雑善に約対し、念仏の功を助顯す。

十二章のごときは、付属・不付属をもって、念仏の功を助顯す。

十三章のごときは、大小対・多少対をもって、念仏の功を助顯す。

十四章のごときは、証不証対をもって、念仏の功を助顯す。

十五章のごときは、護不護対をもって、念仏の功を助顯す。

十六章のごときは、懇懃付属をもって、念仏の功を助顯す。

まさに知るべし、今『集』の宗致、第三章において究竟備足するなり。かくのごとき生起は経になく釈になく、ただ義よりこれに従う。『行巻』の指帰する所、あに長途なるや。

あるいは（聞香）四法に配し、巧に似せ却って今集の所詮にあらず。ただ行にあるが故に。

「二門章」とは、あるいは（本義は聞香）云く「教相章」なり。あるいは（決疑の大綱）云く、「聖浄二門篇」なり。あるいは（鶉木の要義）云く、「聖道浄土章」なり。あるいは（私集）云く、「判教立宗章」なり。あるいは（日溪）云く、「建立浄土章」なり。今謂く衆説並に通ず。今はただ略に従う。しばらく行巻所引の意に順うが故に。

「道綽」とは能立の人を挙げる。道の蹟は具さに『続僧伝』二十四、迦才の『論』下、『瑞応伝』、『新修伝』（已上四部、『漢語灯録』より）の浄土往生伝の中。『仏祖統紀』二十八等の載のごとし。

「禅師」とは、その徳を称するなり。『五会法事讚』に云く、「念仏三昧はこれ真に無上深妙の禅門」と。念仏三昧を修する（すなわち無上の禅門）の人師の故に。禅師の称は必ずしも仏心宗の人を指さず。南岳天台もまた禅師と名く故に。

「立聖」等とは、所立の教を明かす。「聖道」と云い、「浄土」と云うは、各おの所期に約す。『化土』本に云く、

「この界のうちにして入聖得果するを聖道門と名づく、難行道といへり。」  
「安養浄刹にして入聖証果するを浄土門と名づく、易行道といへり。」

と。彼は仏果を期すが故に聖道と云う。此は往生を期すが故に浄土と云う。まさに知るべし、各おの所期に約するなり。『和語灯』一に云々（この娑婆世界にありながら、断迷開悟の道を聖道門とは申すなり。浄土門はまづこの娑婆世界を厭すて、急ぎてかの極楽浄土に生じて、かの国にして仏道を行ずるなり）。意は全く同じ。

「而捨」等とは、いわゆる廃立の義なり。すなわちこれ一重の選択なり。

二に引文の三。初に二門を標挙す。二に行蔵を顕示す。三に応不を勤励す。今は初なり。

## 『安樂集』上止往生浄土

（『安樂集』の上にはいはいはく、「問ひていはく、一切衆生はみな仏性あり。遠劫よりこのかた多仏に値ひたてまつるべし。なにによりてか、いまに至るまでなほみづから生死に輪廻して火宅を出でざるや。答へていはく、大乘の聖教によらば、まことに二種の勝法を得てもつて生死を排はざるによる。ここをもつて火宅を出でず。何者をか」となす。一にはいはく聖道、二にはいはく往生浄土なり。）

旧（要義聞香等）の多く「引証」と云うは、穩やかならず。標章は「正しく浄土に帰するの文」と云うが故に。次にその文を引くなり。下の引く所の『月蔵経』のごとし。これ引証をなすのみ。『集』は十二大門あり。今すなわち第三大門なり。第三門の中に四科あり。今すなわち第三科文なり。第三科の中に五番の料簡あり。今すなわち第五番文なり。

「一切」等とは、八字は『涅槃経』北本二十七、南本二十五に出づ。師子吼品の文なり。これはこれ教証なり。内因のあることを顕す。

「遠劫」等とは、輪回多劫、何ぞ仏に値わずやと。これはこれ理証なり。外縁のあることを示す。

「何因」等とは因縁なり。何に由て出離せずと。これはこれ正難なり。「仍」はすなわち「仍旧」（※依然として）の仍な。「自」はすなわち自業自得なり。「輪回」等とは、ここを死してかしこに生ずは車輪の回転に似るが故に。「火宅」とは『法華』譬喩品に云く、「三界は安きことなし。なお、火宅のごとし。衆苦は充滿して、甚だ怖畏すべく」と。

「依大」等とは、意は『十住毘婆沙論』を指す。難易二道これなり。大乘の言をもつて能別をなすは、小乗は他方浄土を説かざるが故に。「二種勝法」とは、次下の判のごとし。排は排闥（※無理に押し入ること。強引に事を行なうこと）の排のごときなり。『史記』の樊噲伝に云々。

仏性の義は広く『義章』一の玄論三（十門分別）の云々のごとし。瑜伽十支は盛んに無性を談ず。五性各別の故に。その他の諸宗もこれを談ずる者なし。西河は本と涅槃宗を学ぶが故に、今、涅槃法華等の意に依るのみ。

「何者」等とは正標。二門の名義を挙ぐ。上のごとし。

二に行蔵を顕示する二。初に聖道の廢退。二に浄土の興隆。初の聖道の廢退に三。初に難証。二に明由。三に引証。今は初。

## 其聖道止難証

(それ聖道の一種は、今の時証しがたし。)

正しく難証を決して下、すなわち二由一証し、もつてこの義を成ず。偈のいわゆる「道綽決聖道難証」これなり。

二に明由(由を明かす)。

## 一由去止解微

(一には大聖(釈尊)を去れること遙遠なるによる。二には理は深く解は微なるによる。)

初由は時降に約す。後由は機劣に約す。これ『論註』の五由を校す。前の四は今後由に当り、後の一は今の初由に当る。和讃(※正像末和讃)に云々(「釈迦如来かくれましまして」等の十三首)すなわち今の初由。又云々(「正法の時機と思へども」等の三首)すなわち今の後由。『伝絵』の入室の由を述るに云く、「世降(くだ)り、人劣(つたな)くして、(※原本…難行の)小路迷ひやすきによりて」、またこの意なり。

問う。時降と機劣、二門なんぞ異なる。

答う。二門異ならず。しかりといえども浄門のごときは在世の正法・像法・末法・法滅、同じく悲引するが故に。また智愚・善悪・縑素・老少を簡ばざるが故に。旧(本義は聞香)の「解微」の二字を解し、別して法体の幽微(※ごくかすかで微妙であること。神秘的で知りがたいこと)を約すは非なり。『和語灯録』三の云々に違ふ(問サテハ我ラカコトキノ愚ナルモノハ、浄土ノ往生ヲ願ヒ候ヘキカイカン。答、『安樂集』ニイハク、「聖道ノ一種ハ、イマノ時ニハ証シカタシ。一ニハ大聖ヲ去ルコト遙遠ナルニヨル。二ニハ理ハ深クサトリハスグナキニヨル)。

三に引証。

## 是故大集止一人得者

(このゆゑに『大集月藏経』にのたまはく、(わが末法の時のうちの億々の衆生、

行を起し道を修せんに、いまだ一人として得るものあらじ」と。

「大集」等とは、『六要』六に云く、「『大集』一部三十卷（按ずるに曇無讖訳）、外に日藏分及び月藏分（按ずるに并せて那連提耶舍訳）、各一十卷あり。故に「大集月藏分（※本典引文が「分」なので）」と云うなり」（※真聖全二・三九八）と。

「我末」等とは、『六要』また云く、

問。本経の中に未だ此の文を勘えず、如何。答。取意の文也。此の集の上巻、大文第一に教興の由を明し時機に約する下に載する所の文也。謂く彼の経の中に具に五箇の五百年の間、法住及び隱没の相を顕す、明に初の三の五百年の中には次の如く戒・定及び惠堅固なり、第四の五百には造寺堅固なり、第五の五百には鬪諍堅固にして白法隱没することを説くの文の意也。（※真聖全二・三九八）

「末法」とは、正法五百、像法千年、末法万年、これ定判なり。別所の弁ずるがごとし。

「億億」等とは、その類一にあらざる故に。

「起行」は、初に約し、「修道」は後に約す。

「未有」等とは、『六要』また云く、「問。聖道の教、末法の（※省略…中に修行）得果其の証無に非ず、何ぞ「未有一人」等と云や。答ふ。（※省略…今の釈の意、）少の在は（※原本…少は是れ）無に属す、多分に約するか（※聖道門の果の「少なさ」は、多分（比率の大きさ）でいえば「無」の分類に入るか）」と。今いわくこれはこれ縦（よ）しんば答えども、もし奪つてこれを答えば真証の益に非ざるが故に。龍女の後、龍女なし。善財の後、善財なし。いまだこの言あらず。あに過当かな。

二に浄土興隆の二。初は易入。二に引証。今は初。

## 当今末法止可通入路

（当今は末法、これ五濁悪世なり。ただ浄土の一門のみありて通入すべき路なり。）

西河の誕生は、陳文天嘉三年壬午に在す。すなわち仏滅後一千五百十一年にあたる。故に云くしかるのみ。

「五濁」等とは、具さに四句あり。

[406a] 一に濁にして末にあらず。謂く、釈迦仏在世及び正像二時等のごとし。

二に末にして濁にあらず。謂く、舍利弗成仏（華光如来）の後の末法時等のごとし。

三に末にあらず濁にあらず。弥勒在世、及び正像二時等のごとし。

四にまたは末または濁。謂く、今時等のごとし。

「唯有」等とは、唯の言に簡持・決定・顕勝の三義あり。化土巻本に云く、

聖道の諸教は在世・正法のためにして、まったく像末・法滅の時機にあらず。すでに時を失し機に乖けるなり。浄土真宗は在世・正法・像末・法滅、濁悪の群萌、斉しく悲引したまふをや。 (※真聖全二・◆)

和讃に云々（正像末の三時には等）。

「可通入」とは、「通」はすなわち初に約す。「入」はいまし終に約す。もし吉水に依らば、広遠の二義を立つ。『和語灯』一（十七）に云々（道綽は「唯浄土の一門のみありて通入すべき路なり」と釈したまへり。通じて入るべしと云うにつきて、私にこころうるに、二のこころあるべし。広く通ずというは、五逆の罪人をあげてなお往生の機に収む。（乃至）遠く通ずというは、末法万年の後、法滅百歳まで、この教とどまりて、そのときに聞きて一念する。皆往生すといえり等）。

これ自ずから旨あり。広通は機劣に約す。遠通は時降に約す。上の二由とあい映顯するのみ。

二に引証。

## 是故大経止不取正覚

（このゆゑに『大経』にのたまはく、へもし衆生ありてたとひ一生悪を造れども、命終の時に臨みて、十念相續してわが名字を称せんに、もし生ぜずといはば、正



覚を取らじ」と。

「大経」とはすなわちこれ第十八願文なり。

「若有」等とは、十方衆生なり。

「縦令」とは、与（※順接仮定条件の意味か）にしてこれを言う。

「一生」等とは、下々品に合するなり。『論註』は「普共」の言を釈し、併せて願文及び下々品の文を引く。けだし今はかの釈を本とするなり。いわゆる大経は法を顕す。觀経は機を顕すものなり。

[406b] 「臨命」等とは、またこれ下々品の意なり。いわく逆悪苦逼の劣機の極みなり。

「十念」等とは、鸞師は大経に依りて信心を主とする故に、信方便易行を云う。綽導の二師は觀経に依りて念仏を主とする故に、願文を引きて並べて称我名字を云う。施設は異なるといえども別途なし。信行互具故に。この称名は無上信心を依止して生ずるなり。もとより（※原文は「固矣」）、無明猶在の類にあらざるなり。

問う。経に「具足」と云う。今は「相続」と云う。頭数に拘（※こだわ）るに似たるがいかな。（※論註八番問答の第八問答参照）

答う。頭数に拘るにあらず。集の上（三十七）に云く、

十念相続といふは、これ聖者の一の数の名なるのみ。ただよく念を積み（常能念仏）思を凝らして（係意）他事を縁ぜざれば（專精）業道をして成弁せしめてすなはち罷みぬ。用ゐざれ。またいまだ労はしくこれが頭数を記せず。

文意を見るべし。

「若不」等とは、余願のなき所、二利円満機法一体の旨、ここに在りし。

三に応不を勤励する三。初に総。二に別。三に結。今は初。

## 又復一切止都不自量

（また一切衆生はすべてみづから量らず。）

浄門の教義、かならず信機あり。故に云くしかるのみ。高祖はしばしば（※原本…数）「思量己能（※「おのれが能を思量せよ」。信巻の『礼讃』前序の宗祖よみ）」と言う。またこの謂なり。

二に別に二。初に聖道の不堪相。二に浄土の応機相。初に聖道の不堪相に四。初に遇大機。二に遇小機。三に世善機。四に造悪機。今は初。

### 若抛大乘<sub>止</sub>曾未措心

（もし大乘によらば、真如実相第一義空、かつていまだ心を措かず。）

これは上三品の機を挙ぐるなり。

「真如」等が八字、『観仏三昧経』に出づ（安楽集に引く。行巻また転引す）。

[407a]文に云く、「仏地の果徳」等と。

「真如」は真は謂く真実。如は謂く如常。仏に在りて変らず。生に在りて縁に随う。不増不減自性清浄者なり。『起信』等のごとし。

「実相」は無相にして相なるが故に実相と云う。無相故に相ならざることなし。しこうして相故に能相なし。能相なきが故に諸相宛然す。相ならざることなきが故に諸相寂滅。永く思議の表を出づる者なり。『義章』等のごとし。

「第一」等とは、真空妙有。有を出だして有なるものなり。『玄論』等のごとし。

「曾未」等とは、いわゆる解微なるものなり。

二に遇小機

### 若論小乘<sub>止</sub>未有其分

（もし小乗を論ぜば、見諦修道に修入し、乃至、那含・羅漢、五下を断じ五上を除くこと、道俗を問ふことなく、いまだその分あらず。）

これは中上・中中の二品の機を挙ぐるなり。

「見諦」等とは、三道の中に就く。無学道を略す。謂く五停、総別の念処、四善根、資糧加行となす。初果の入心これを見諦と謂う。初果の住心、第四

果向に至りてこれを修道と謂う。第四果これを無学と謂う。今初の二を挙げ、しかして後の一を略す。

「那含」は、五那含の第三果なり。

「羅漢」は、すなわち第四果なり。今後の二を挙げて、しかして前の二を略す。

「五下」とは、つぶさに五下分結と云う。一に身見（執我我所）、二に戒禁取（非因計因）、三に疑、四に貪、五に瞋。この中貪瞋の二惑、正しく欲界に生ず。よしんば（※**原本・縦**）貪瞋を断じてよく上界に生ずれども、身等の三惑にてまた欲界に還える。那含の聖者、五下皆断ず。故に不還と云う。

「五上」とはつぶさに五上分結と云う。一に色貪、二に無色貪、三に色無色掉拳（謂く障禅定なり）、四に色無色慢、五に色無色無明。この五よく上二界に生ずる故に、羅漢聖者、五上皆除く。故に無学と云う。『義章』第十五等のごとし。

「無間」等とはまたこれ解微相なり。

### 三に世善機

## 縦有人天<sup>止</sup>持得者甚稀

（たとひ人天の果報あれども、みな五戒・十善のためによくこの報を招く。しかるを持得するものは、はなはだ希なり。）

これ中下品の機を挙ぐるなり。

「五戒」とは、一に不殺、二に不盜、三に不邪淫、四に不妄語、五に不飲酒。前の四は性罪、後の一は遮罪。また前の四は戒体、後の一は能護。『義章』十二のごとし。

「十善」を积せば、十悪の反。また『義章』のごとし。

「然持」已下は、目に触るるにみなこれなり（※**眼前の事実である**）。

### 四に遇悪機

## 若論起惡<sup>止</sup>暴風駛雨

（もし起惡造罪を論ぜば、なんぞ暴き風駛き雨に異ならん。）

これ下三品の機を挙ぐるなり。

「起悪」は惑障。「造罪」は業障。

「風」は色質なきが故に、煩惱の内にあるを比す。

「雨」は形相あるが故に、業道の外にあるを況す。

「暴」は猛なり、急なり。『爾雅』（釈天）に云く、「日出而風為暴（日出で風暴たり）」。

「駛」は馬の行疾なり。あるいは（決疑）起悪を雨に喩え、造罪を風に喩うは穏やかならず。また（聞香）風の字を解して八風となすは非なり。八風はこれ動縁。心動にあらざる故に。

上来四科は九品の機を撰す。もって聖道の不堪相を示す。原もとそれ（※利益章[1-952]）『観経』は浄土初門ごとの者なり。定善をもって一代観行の機を撰す。散善をもって一代福行の機を撰す。上の機は観となす。下の機は福となす。ならびにこれ修諸功德の中の差別なり。外に「聖道万行」（※道綽讚）といひ、内に方便仮門（※消息じ）という。今はすなわち対外ゆえに、二門章を起す。次にすなわち对内ゆえに、二行章来る。今まさにかの不堪相を顕示せんとす。故に具さに九品を歴てこれを論すのみ。

二に浄土の応機相

### 是以諸仏止定得往生

（ここをもつて諸仏の大慈、勸めて浄土に帰せしめたまふ。たとひ一形悪を造れども、ただよく意を繋けて専精につねによく念仏せば、一切の諸障自然に消除して、さだめて往生することを得。）

「是以」とは上を承けるの辞なり。

「諸仏」は弥陀経による。三経ていじ鼎峙す。上（※先ほど）は大経「※の願文」を挙ぐ。これはこれ法実にして観経を合す。すなわちこれ機実。喚遣具足す。今は小経を挙げ、もって証誠の大悲を示すは、機法を合説す。証誠護念の悲極ゆえに。

\*1「選択本願は浄土真宗なり、定散二善は方便仮門なり。」（註釈版 737 頁）

「勸帰」等とは、一代の終帰の者なり。讚に「世尊説法時將了（※世尊法を説きたまふこと、時まさに了おわりなりとして、慇懃に弥陀の名みなを附属したまふ。五濁増の時は多く疑謗し、道俗あひ嫌ひて聞くことを用ゐず。『法事讚』より。『報恩講私記』にも引用される）」と云うが故に。

「縦使」等とは、上の「縦令」等（※）の意を承く。これ信機の相なり。「但能」等とは、上の十念誓意を承く。これ信法の相なり。いわゆる「顕大聖興世正意」は信法、「明如来本誓応機」は信機。列祖の同軌・同承の心印。ただここに在るか。

「縦使」とは造罪の多少を論ぜざるなり。

「一形」とは一相続身。

「造悪」とは、二河各おの長さ百歩の者なり。

「但」とは、余行なきを顕す。

「能」とは、不堪に対するなり。

「繫意」とは、心を願心に繋けるなり。すなわち淳心。

「專精」とは、専は一なり。純に至りて精と曰い、すなわち一心。

「常能」等とは、念報の相続。すなわち相続心。時に前後なく、初後不二ゆえに。

「一切」等とは、惑障・業障。その数一にあらず。

「自然」等とは、任運にして得る。機の計を加えざるが故に。和讚に（云々）。（軌に和讚を釈して云々は是ならず）。『論註』云く、「かの無礙光如来の名号は、よく衆生は一切の無明の闇（※原本…一切の無明）を破し」とは、惑障を除くなり。経に云く、「八十億劫の生死の罪を除く」（※第一問答）とは、業障を除くなり。『観念法門』に云く、「また横死（原本…また横病、横死、横に）厄難あることなく、一切の災障自然に消散す。」（※護念縁）とは、報障を除くなり。

「定得」等とは、上の「若不」等の意を承く。上はすなわち弥陀の招喚なり。今すなわち諸仏の讚勸なり。釈迦の発遣の理在知るべし。

### 三に結

## 何不思議都無去心也

（なんぞ思量せずしてすべて去く心なきや」と。）

「何不」とは、上の「都不自量（すべてみづから量らず）」を承く。

「去」とは、来と同じ。談ずるに左右あるのみ。彼より此に言うはすなわち直ちに来と曰う。此より之を言えばすなわち「去心」と曰う。『銘文』に云々（娑婆をたちさりて浄土へゆくなり等）（※註釈判 646 頁）

三に私積に三。初に判教を明かす。二に指帰を明かす。三に血脈を明かす。初の判教を明かすに二。初は且く諸宗を明かし、二には正しく浄土を明かす。初は且く諸宗を明かすに二。初は標。二は積。今は初

### 私云竊計止随宗不同

（わたくしにいはいはく、ひそかにはかりみれば、それ立教の多少、宗に随ひて不同なり。）

『釈箋』一の一（初）に云く、「他と共せざるが故に名けて私となす」と。公私の私なり。けだし謙辞のみ。

「竊」もまた私なり。

「計」とは較なり。今まさに教えを判ぜんに、まず他例を挙ぐ。

凡そ分教開宗、みな廃立あり。且く法相の意のごとし。有空を廃し、中道に帰すべし。乃至真言。顕教を廃し密教に帰せしめんと欲す。諸宗みなしかり。

今『集』もまたしかり。聖道を廃し、浄土に帰せしめんと欲す。私積の始終、まったく標章を承けることなり。

二に積の五。初に法相。二に三論。三に華嚴。四に天台。五に真言。今は初。

### 且如有相止有空中是也

（しばらく有相宗（法相宗）のごときは、三時教を立てて「釈尊の」一代の聖教を判ず。いはゆる有・空・中これなり。）

有相宗とは、すなわち法相宗。色心等の諸法において、種々相を建立する故に。この宗の所依は、深密等の経。瑜伽等の論なり。

「立三」等とは、しばらく『義灯』に依る。初に云く、

「初は外道の法有我無に対す。次に小乗の諸法皆空に対す。終に一切乗の機に対するが故に、唯識中道の義を説く。すなわち勝義諦相品これなり。これはこれ深密の三時教なりと。また『枢要』に依りて初に云く、「仏は涅槃語（当に一百年）、かの大天によつて部に執じて競起す。多くは有見に著し、龍猛菩薩（当に六百年）、歡喜地を証し、大乘の無相空教を採集す。『中論』等を造る。真要を究暢し、かの有見を除し、聖提婆等の諸大論師、『百論』等を造し、大義を弘闡す。これによりて衆生、復た空見に著す。無著菩薩、また初地に登り、法光定を証す。大神通を得、大慈尊に事える。請いてこの論を説く」等と。

これはこれ瑜伽の三時教なり。また述記の序に云く、

「誕茲融識。秀迹伝灯。孤明をもつて俱舍を晦くし、同塵を示して有を説く。慧縛をもつて撰論を解し、縦聖にして談空を表す。（乃至）この頌を研精し、用いて玄極を表する」等と。

これはこれ唯識三時教なり。判教立宗は『義林章』のごとし（総科簡章）。

[409b]

二に三論宗

如無相宗止声聞藏是也

（無相宗（三論宗）のごときは、二藏教を立ててもつて一代の聖教を判ず。いはゆる菩薩藏・声聞藏これなり。）

無相宗とは、すなわち三論宗。諸法皆空をもつて宗となす故に。

この宗の所依は『般若』等の経、『中観』等の論なり。

「立二」等とは、この宗、無判をもつて判となす。すでに無判をもつて判となすが故に、



往いて判ぜざるはなし。故に『経論』を註して二藏二教等の判あり。藏教の判、もとより(※本自)南北、別の処述のごとし。西河の「然南」(※出扱不明)またその遺なり。判教立宗は「教迹義」のごとし(玄論第五)(※吉藏『大乘玄論』卷五「教迹義」)。

### 三に華嚴宗

#### 如華嚴宗止円教是也

(華嚴宗のごときは、五教を立てて一切の仏教を撰す。いはゆる小乗教・始教・終教・頓教・円教これなり。)

華嚴宗とは、所依をもつて名となす。また法界宗と名く。所詮をもつて名となす。

「立五」等とは、小乗三乘一乘、三乗の中について、前二は漸となし、後一は頓となす。前二の中について、初の名を始となし、後の名を終となす。判釈の精、台と並び馳せる。広く『探玄』の「教分」等の説のごとし。

### 四に法華宗

#### 如法華宗止醍醐是也

(法華宗(天台宗)のごときは、四教五味を立ててもつて一切仏教を撰す。「四教」といふは、いはゆる藏・通・別・円これなり。「五味」といふは、いはゆる乳・酪・生・熟・醍醐これなり。)

また所依をもつて名となす。また天台宗と名く。能弘をもつて名となす。

「立四」等とは、四教は化法。別して化儀あり。頓漸秘不定なり。

「五味」とはすなわち化儀相。

「藏」はこれ小乗。

「通」はこれ三乘同行。

[410a] 「別」はこれ独り菩薩教。

「円」はこれ仏乘。

「乳酪」等とは、具さに二義あり(謂く相生濃淡なり)。一に能彼の説相に約し、二に所彼の徳益に約す(云々)。玄義等のごとし。

### 如真言宗止密教是也

(真言宗のごときは、二教を立てて一切を撰す。いはゆる顕教・密教これなり。)

真言宗とは、『大日経疏』に云く、「梵には曼荼羅と曰う。すなわちこれ真語如語不妄不異の音」と。所詮をもつて名となす。また曰く、曼荼羅宗と。すなわち梵音につくなり。

「立二」等とは、二教論に云く、

「それ仏に三身あり。教はすなわち二種。應化開設す。名けて顕教と曰う。言顕略にして機を逗まる。法仏の談話この密蔵を謂う。言は秘奥の実説なり。」

その顕教とは華嚴法華等の経なり。その密教とは大日三部等なり。広く義釈の二教論等のごとし。

二に正しく浄土を明かすに三。初は略して判教を明かす。二はよつて宗名を決する。三は広く判教を明かす。今は初。

### 今此浄土止土門是也

(いまこの浄土宗は、もし道綽禪師の意によらば、二門を立てて一切を撰す。いはゆる聖道門・浄土門これなり。)

文意は見るべし。

「若依」等とは、龍樹のごとく難易二道を判ず。今は名の便をもつて道綽の判による。故に「若」等と云う。

### 問曰夫立止不足疑端

(問ひていはく、それ宗の名を立つることは、本、華嚴・天台等の八宗・九宗にあり。いまだ浄土の家においてその宗の名を立つることを聞かず。しかるをいま浄土宗と号する、なんの証拠かあるや。)

答へていはく、浄土宗の名、その証一にあらず。元暁の『遊心安樂道』にはく、「浄土宗の意、本凡夫のためなり、兼ねては聖人のためなり」と。また慈恩（窺基）の『西方要決』にはく、「この一宗による」と。また迦才の『浄土論』にはく、「この一宗ひそかに要路たり」と。その証かくのごとし。疑端に足らず。）

「八宗九宗」等とは、『三国仏法伝通縁起』（東大寺凝然作）の下に云く、「上来、略して八宗所伝の縁起を陳ぶ[40b]」（一に三論宗。二に法相宗。三に華嚴宗。四に俱舍宗。五に成実宗。六に律宗。七に天台宗。八に真言宗）。しかるに震旦の国は禪法を弘通す。これ達磨大師所伝の宗旨なり。（乃至）近代源空上人已後、浄土宗を立て、世間を弘通す。空公の門人、各おの徒属を立つ。義途極めて多し。（乃至）もしこの二を加わば、これを十宗とすべし。」と。

『和語灯』四（二十一）の十二問答に（云々）

（問いて云く、八宗九宗の外に浄土宗を立る事。自由（※じゆ 勝手気ままの意か）の条かなと、余宗の人申候をば、いかんが（※省略・申し）候べき。答。宗の名を立る事は、仏の説にあらず、自ら心ざすところの経教について教る義をさとり極めて、宗の名をば判ずる事なり。諸宗のならい皆もてかくのごとし。いま浄土宗の名をたつる事は、浄土の正依の経につきて、往生極樂の義をさとりきわめて御座（※おはしま）す先達の、宗の名をばてたまへるなり。宗のおこりをしらざるもの、左様の事をば申候なり。）（浄真全六・五六一、第一問答）。

『法要十三』（十四）の『破邪顕正鈔』に（云々）。

（一）。念仏は天台・法相等の八宗のうちにあらず、浄土宗と号して宗の名をたつること自由たるよしの事。

この条もとより宗の名をたつることは、仏説にあらず。滅後の人師ころざすところの経論についてその名をたつるところなり。いま世間に流布するところの八宗といふは、真言・天台・華嚴・三論・法相・律宗・俱舍・成実なり。これすなはち聖武天皇の勅願として東大寺をたてられしとき、この寺には八宗を兼学すべきよしさだめをかれしよりこのかた、八宗の号あり。（乃至）しかりといひて、この八宗の[41a]ほかに宗なきにはあらず。すなはちかの仏心宗もそのときわが朝にわたらざるゆへに八

宗にいらす。 (乃至) ひとこれをよびくはふるとき九宗と称す。 浄土宗をくはへんと  
き十宗と号せんこと、またなにのさまたげかあらん等)。 (真聖全三・一六一)

『笑螂譬』(※法霖著) 上之下(十三丁)に云く、

「釈書(二十七)に諸宗の志は浄土宗をもつて同じく俱舎・成実を例として寓宗とな  
す。この国の付庸に譬(※さと)す。ああ戻(※さだ)まれるかな(※安らかだなあ。

参照「優哉柔哉、亦是戻矣」。「韓詩外伝」卷八第二十五章)。

超勝独妙の一宗、あに他の幕下に付庸せんかな。漢の高祖のごときは、始めすなわ  
ち咸陽に徭役(※ようえき 賦役)して関中の王となり、終にはすなわち四海を平定  
う。諸侯推尊し皇帝の位に即く。

今またしかり。念仏の一門、しばらく上世にありて縦んば(※仮に)寓宗に似れど  
も、末代の今、大東に弥ねく布かれ、緇素貴賤の帰者は十にして八九あり。いわんや  
また経道滅尽の後をや。(乃至)本藩と云うか。付庸と云うか。

大いなるかな浄土真宗。昔日の大師の遭難の日、門人(西河(※注に「誤り……私に云  
く西阿か)諫めて曰く、それ難来るなり。ただ浄土の一宗を別立せんによる。願わく  
は師よ、少しく老身の労を保ち、しかしてしばらく小子の愁を悲愍せよ。権に(※?  
かりに)恵心院の遺風に順じて、身を台宗に在し、もつて念仏を弘め、この難をな  
くすべし。大師色を作して呵(※しか)りて曰く、「小子何をか言わん。もし天台に  
依らば土を判じて甚だ卑し(『浄名疏』一に云く、同居浄土とは、無量寿国に等し)。  
もし法相に依らば土を判じて高といえども、地上の聖にあらず、すなわち入ることあ  
たわず(仏土義林に云く、西方は他受用報土に等し)。この故に我れ善導の積義に依  
りて浄土一宗を建立す。もつて凡夫入報の義を顕すなり。道にして[411b]行くべし。  
たとい身は車礫を被れども何ぞ痛みこれあらん」と。門人感泣してまた言をあたわず。

従上諸文(※上の諸文に従う)。もつて併せて今の意を解すべきのみ。

「元暁」とは、華嚴の宗師なり。伝は『宋僧伝』第四(十七紙)に載するがごとし。

『遊心安樂道』の文は十四紙に出づ。

「慈恩」とは、法相の宗師なり。伝は『宋僧伝』の第四(初)に載するがごとし。

『西方要決』の文は二十四の紙に出づ。

「迦才」とは、伝記に載なし。

『浄土論』の文は上の十三紙に出づ。

諸本みな理まします。ただ『要決』は信じ難し。しかれば慈の蔵目録に（云々）。けだしこの説に依るなり。

按ずるに『漢語灯』七の八紙、逆修説法、その宗名を証する（※『浄真全』六・一二三）。さらに「真宗遇いがたし」の文を引く。今他に対して証拠を的出せんと欲す。故にただ他師を引くのみ。

三に広く判教を明かすに二。初は他を簡ぶ。二は正しく明かす。今は初。

### 但諸宗立教正非今意

（ただし諸宗の立教は、まさしくいまの意にあらず。）

文意見るべし。

二に正しく明かすに二。初は標。二は釈。今は初。

### 且就浄土止浄土門

（ただし諸宗の立教は、まさしくいまの意にあらず。しばらく浄土宗につきて略して二門を明かさば、一には聖道門、二には浄土門なり。）

文意見るべし。

二に釈に二。初は聖道。二は浄土。初の聖道に二。初は別頭。二は総示。今は初。

### 初聖道門者止律宗而已

（初めの聖道門とは、これにつきて二あり。一は大乗、二は小乗なり。大乗のなかにつきて顕密・権実等の不同ありといへども、いまこの『集』（安樂集）の意、ただ頭大および権大を存ず。ゆゑに歴劫迂回の行に当れり。これに准じてこれを思ふに、密大および実大を存ずべし。しかればすなはち、いま真言・仏心（禅宗）・天台・華嚴・三論・法相・地論・撰論、これら八家の意まさしくこれにあり、知るべし。次に小乗とは、すべてこれ小乗の經・律・論のなかに明かすところ

の声聞・縁覺、断惑証理・入聖得果の道なり。上に准じてこれを思へば、また俱舍・成実・諸部の律宗を撰すべきのみ。」

「二者小乗」とは、問う。宗（※集？ 安樂集か）に云く「大乘の聖教等に依る」と。今何ぞ小乗を撰するや。

答う。今は集の意に依り、総じて一代を判ず。これはこれ元祖の類を推するの說なり。下の密・実をまた意を失するなり。

「就大」等とは、[412a] 顯密の真言、権実の天台、諸宗を合会し、宗意を准積するものなり。綽公の在世、密教はいまだ至らず。その發揮するところは涅槃・仏性にして顯大権大の旨を過ぎず。『集』上（三十八）に云く、

「仰ぎておもんみれば、大聖三車をもつて招慰し、しばらく羊鹿の運は権の息にしていまだ達せず（声縁二乗）。仏、邪執を訶し（二乗）、上求菩提を彰す（※原本…邪宗は上求菩提を障ふと訶したまふ）。たとひ後に回向するも、なほ迂回と名づく。もしただちに大車に挙るも（菩薩大乘）、またこれ一途なり。」

三車の宗義、文にありて見るべし。

「准之」等とは、台密の二条、これ頓にして漸にあらず。ここをもつて『禿鈔』判じて豎超となす。法はこれ頓といえども、機に被りて漸と成す。故に「頓中の漸」と云うのみ。

『大經釈』（漢語灯一之三紙）に云く、

「天台真言は皆頓教と名く。しかるに彼は断惑証理（被機成漸）故に、なおこれ漸教なり。未断惑凡夫の直ちに三界長夜を出過することを明すは、偏へにこの教。故にこの教をもつて頓中の頓とするなり。」（参照 浄土宗全書テキストデータベース）

（「天台真言は皆頓教と名くといえども、惑を断ずるが故になおこれ漸教なり。いまだ惑を断ぜずに三界の長夜を出過するが故に、この教をもつて頓中の頓とするなり」（浄真全六・二八〇（無量寿經釈））。

「然則」等とは、「仏心」とは禅宗これなり。不立文字、直指人心、見性成仏、故に仏心と云う。また禅那を宗となす故に禅宗と云う。

『宗鏡』の意に依らば、その宗の系統、過去毘婆尸仏より七伝し釈尊に至る。二十八伝



して達磨に至る。もつて東土の始祖となし、六伝して曹溪に至り、曹溪は五派を出づ。第一の雲門は雪竇に至る。その道大弘、後に漸く微々。第二は偽仰(※瀉仰か)の父子、道徳は大いに一時に鳴る。二師の後、玄音響を絶つ。第三の法眼は、三伝して永明に至る。その化大いに振るう(伝説として高麗にその道流行す)。第四の臨濟、第五の曹洞、この二派の子孫緬緬し、今、大東に伝わるは、ただこの二のみ。

「地論」とは、『十地論』に依りて[412b]、宗を立つ故に。論は十二卷。天親菩薩の造。菩提留支の訳。華嚴十地品を訳す。合水寺法上、禪定寺靈粲、浄影寺慧遠等、この宗を相承し、唐に及ぶ。講は多からず。華嚴宗に属す。

「撰論」とは、『撰大乘論』に依りて宗を立つる故に。論は本末に亘り、四代の訳あり。合して四十八卷を成す。無著菩薩、阿毘達磨經中の撰大乘品を訳すは三卷(真諦訳三卷。扇多訳二卷、玄奘訳三卷)。世親の釈論は十卷(真諦訳十卷、笈多訳十卷、玄奘訳十卷)。無性の釈論は十卷(玄奘訳十卷)。真諦の門人慧曠法師、法常法師等、各おの、この論を講ず。唐に及び法相宗に属す。その余五宗。上に略釈するがごとし。

「次小」等とは、「經」はすなわち四含。「論」はすなわち六含。『発智』・『婆娑』等なり。「律」はすなわち五部。「声聞・縁覚」とは、利鈍を別となす。九同二異、別所の因のごとし。見思惑を断じ、四諦の理を証す。賢聖修入す。

「亦可」等とは、「俱舍」は所依をもつて宗と名く。五位七十五法をもつて一切の色心の諸法を撰し、毘曇を祖述す。時に反量あり、□(※注には「私云恐脱するは「詮」の字)有門に在す。『俱舍論』三十卷、世親造あり(真諦訳二十二卷、玄奘訳二十卷)。真諦訳は慧愷の序あり。玄奘訳には普光法宝神泰の疏あり。各おの三十卷。円暉は頌疏あり。惠暉遁麟さらにこれを註す。枝葉蔓延し、法相宗に附す。

「成実」はまた所依をもつて宗を名く。四位八十四法をもつて一切を撰す。詮ずるに空門に在す。『成実論』二十卷、訶梨跋摩、これ師子鎧と云う、所造なり。羅什の訳。梁代に盛行す。唐に及び[413a]三論に附す。

「律宗」はまた所依をもつて宗となす。すなわち三学の中の戒なり。防非止悪、定慧相藉。如来の滅後、五伝して優波鞠多に至る。五弟子あり、各おの親しく一見し、律を五部に分つ。一は曇無徳部、すなわち四分律なり(六十卷。仏陀耶舎、竺仏念と共に訳す)。二に薩婆多部、すなわち十誦律なり(五十八卷、弗若多羅、羅什の共訳)。三に迦葉遺部、すなわち解脱律なり(三十卷。仏陀什、竺道生の共訳)。五婆蹉富羅部。律本いまだ度せず。さらに僧祇律あり(四十卷、仏駄跋陀羅、法顕と共に訳す)。合して六部となす。前の五はこれ別、僧祇はこれ総なり。十誦等ありといえども弘行せず、ただ四分律宗の三家あり。一に日光寺礪、二に西大原懷素、三に終南山道宣、各おの書を著し弘伝す。

問う。梵網瓔珞等の経、大乘の諸律あり。何ぞ小乗に属すや。  
答う。大小共に学す。理在絶言。今は家の成すに約すのみ。  
問う。南山はすでに分通大乘と言う。何ぞ偏に小乗に属すや。  
答う。小乗を本となす故に。

二に総示

### 凡此聖道止外加仏乗

(おほよそこの聖道門の大意は、大乘および小乗を論ぜず。この娑婆世界のなかにおいて、四乗の道を修し四乗の果を得。四乗とは三乗のほかには仏乗を加ふ。)

要を取りてこれを言わば、此土入聖故に聖道と名く。四道四果、一切を撰尽す。これ四車の意なり。逆意はこれを解する者なり。

二に浄土に二。初は標。二に釈。今は初

### 次往生浄土止浄土之教

(次に往生浄土門とは、これにつきて二あり。一には正しく往生浄土を明かす教、二には傍らに往生浄土を明かす教なり。)

文意見るべし。

[413b]二に釈。初に正依。二に傍依。初の正依に三。初に正列、二に引例、三に結示。今は初。

### 初正明往止三部也

(初めに正しく往生浄土を明かす教といふは、いはく三経一論これなり。「三経」とは、一には『無量寿経』、二には『観無量寿経』、三には『阿弥陀経』なり。「一論」とは、天親の『往生論』(浄土論)これなり。あるいはこの三経を指して浄土の三部経と号す。)



「一無」等とは、十二代の訳中、第四なり（五存七欠。経録の出没は別図に出すがごとし）。

「二観」等とは、三代の訳中、第二なり（具さには別録のごとし）。

「三阿」等とは、三代の訳中、第二なり（具さには別録のごとし）。

問う。天台の『十疑論』には十余部の経論を出す。迦才の『浄土論』には十二経七論を出す。『要集』の「極楽証拠門」の中、法華華嚴等の許多（※あまた）の経を出す。『助道法』の中に至りて略して七経を取る（『観経』・『大経』・『観仏三昧経』・『般舟経』・『念仏三昧経』・『十往生経』・『阿弥陀経』）（※未確認）。今はただ三経一論をもって正依となすは何。

答う。ここに二義あり。一は相承に依る。二には義理に依る。初めに相承とは、これまた三あり。一は鸞師を承くる。二には綽師を承くる。三には導師を承くる。

初に鸞師とは『論註』（初丁）の通申義を積して云く、

「釈迦牟尼仏、王舎城（『大経』・『観経』）および舎衛国（『弥陀経』）にましまして、大衆のなかにおいて説きたまへり」等なり。

二には綽師とは、『安樂集』下（二十五）に諸経を挙げる中、初に三部を列し、四に『隨願往生経』を引き、五に『平等覚経』を引き、六に『十往生経』を引く。しかるに余は（※三部経以外は）みな「また・もし・さらに」等と云う。今章に引く所の文、正しく三経の旨を述ぶるに等しきなり。

三には導師とは、三部の鼎峙、玄談に指すがごとし。

二に義理とは、これまた二あり。初に顕説に約し、二に隱意に約す。

初の顕説とは、これまた三あり。初に三願に順ずるが故に。二に三機に蒙るが故に。三に三往生を述ぶるが故に。常に判ずる所のごとし（化土卷・大経和讃等）。

次に隱意とは、これ[414]また二あり。一に教主に依るが故に。二に所詮に依るが故に。初の教主とは、弥陀・釈迦・十方これなり。次に所詮とは、機法・証誠これなり。常に判ずる所のごとし（総序・三経和讃・『口伝鈔』・『改邪鈔』等）。

また一論のごときは三経の通申故に。いわんやまた「浄入願心」・「利行満足」は成仏の因果、往生の因果、三経の蘊奥、他力の極致。何をもつて加えん。故に併せて正依となすのみ。

## 問曰三部止成仏経是也

(問ひていはく、三部経の名またその例ありや。答へていはく、三部経の名その例一にあらず。一には法華の三部、いはく『無量義経』・『法華経』・『普賢観経』これなり。二には大日の三部、いはく『大日経』・『金剛頂経』・『蘇悉地経』これなり。三には鎮護国家の三部、いはく『法華経』・『仁王経』・『金光明経』これなり。四には弥勒の三部、いはく『上生経』・『下生経』・『成仏経』これなり。)

「一者」等とは、天台の所依。

『無量義経』は一巻。蕭斉の曇摩伽陀耶舍訳。これ法華を説くの前序なり。

『法華経』は八卷二十八品。姚秦の羅什訳。

『普賢観経』は一巻。曇摩蜜多訳。阿難・迦葉・弥勒、同じく修行の法要を問ひ、仏ために普賢観門、および懺悔六根罪法を説く。これ勧発品と表裏を相為す。故に智者大師の法華懺法まつたくこの経に依る。

「二者」等とは、真言の所依。『大日経』は七卷。善無畏、一行と共に訳す。『金剛頂経』は二卷。不空訳。『蘇悉地経』は二卷。善無畏訳。

「三者」等とは、天台の所依。中について『仁王経』は二卷。羅什訳。『金光明経』は四卷。曇無讖訳。

「四者」等とは、法相の所依。『上生経』は一巻。宋の居士、沮渠京声訳。『下生経』は六紙半。竺法護訳。『成仏経』は一巻。羅什訳。

[414b]

三に結

## 今者唯是止正依経也

(いまはただこれ弥陀の三部なり。ゆゑに浄土の三部経と名づく。弥陀の三部はこれ浄土の正依経なり。)

文意見るべし。

二に傍依

## 次傍明<sup>止</sup>諸論是也

(次に傍らに往生浄土を明かす教といふは、『華嚴』・『法華』・『随求』・『尊勝』等のもろもろの往生浄土を明かす諸経これなり。また『起信論』・『宝性論』・『十住毘婆沙論』・『摂大乘論』等のもろもろの往生浄土を明かす諸論これなり。)

「華嚴」とは六十卷。仏駄跋陀羅訳。八十卷。実又難陀訳。普賢行願品四十卷。般若訳。その文甚だ広し。文類に引くがごとし。中について行願品第四十、普賢発願偈を説いて云く、

「願わくは我命終わらんと欲する時に臨みて、尽く一切もろもろの障碍を除き、面にかの仏阿弥陀を見て、すなわち安楽国に往生せんことを得ん。」

『文殊発願経』仏駄跋陀羅訳、偈ありてこれと略同す。五言句。二字を除いて異たるのみ。

「法華」とは、上にすでに釈するがごとし。「薬王品」に云く、

「もし女人ありて、この經典を聞き、如説修行せん。ここにおいて命終、すなわち安楽世界の、阿弥陀仏・大菩薩衆の圍繞せし住処に往きて、蓮華中の宝座の上に生ず。」

「随求」とは一卷。不空訳。文に云く、

「世尊われ当来末法の雑染の世界、悪趣の衆生のために、滅罪成仏陀羅尼を説き、三密の門を修し、念仏三昧を証し、浄土に生ずるを得ん」と。

「尊勝」とは一卷。杜行顛(真元録に云く仏陀波利訳)訳。文に云く、

「日日この陀羅尼を誦し二十一遍、罪滅福増、衆人愛敬、命終の後、極楽国に生ず」と。

「起信論」とは一巻。馬鳴造、真諦訳。文に云く、

「もし人専ら西方極樂世界の阿弥陀仏を念じ、所修[415a]の善根、回向してかの世界に生ぜんと願求せば、すなわち往生を得る。」

「宝性論」とは五卷。堅慧造、勒那摩提訳。かの第一校量功德品に云く、

この諸功德に依りて、願わくは命終時において、無量寿仏の無辺の功德の身を見んことを得ん。我および余の信者、すでにかの仏を見おわんぬ。願わくは離垢の眼を得て、無上菩提を成ぜん。

「十住」等とは、知るべし、それ傍依に属す。上にすでに弁ずるがごとし。「撰大乘論」とは、また上に釈するがごとし。第四十八の釈智差別勝相品に云く、

衆宝界如覚徳業。我説句義所生善。ここによりて願わくは悉く弥陀を見、浄眼を得るによりて正覚を成ぜん。

余の文解すべし。

二に旨帰を明かす三。初に正明、二に例を挙げ、三に結勧。今は初

### 凡此集中止理深解微

(おほよそこの『集』(安樂集)のなかに聖道・浄土の二門を立つる意は、聖道を捨てて浄土門に入らしめんがためなり。これにつきて二の由あり。一には大聖(釈尊)を去れること遙遠なるに由る。二には理深く解微なるに由る。)

「この『集』」とは『安樂集』を指す。

「立聖道」とは標章にして「捨てて」等の意に応ず。すなわち今集の旨帰なり。

「就此」等とは、二由を挙げ示すものなり。

二に例を挙ぐるに二。初は総示。二は別に挙ぐ。今は初。

### 此宗之中止皆有此意

(この宗のなかに二門を立つることは、独り道綽のみにあらず。曇鸞・天台(智&M043614)・迦才・慈恩(窺基)等の諸師みなこの意あり。)

文意見るべし。

二の別挙に三。初に正しく鸞師を挙ぐ。二に同じく二師を例す。三に兼ねて慈恩を挙ぐ。初の正しく鸞師を挙ぐに二。初は引文。二は会義。今は初。

### 且曇鸞止乘船則樂

(しばらく曇鸞法師の『往生論の註』(上)には、**「つつしみて龍樹菩薩の『十住毘婆沙』(易行品)を案ずるにいはく、〈菩薩、阿毘跋致を求むるに、二種の道あり。一には難行道、二には易行道なり〉と。〈難行道〉とは、いはく五濁の世に無仏の時に於いて阿毘跋致を求むるを難となす。この難にすなはち多くの途あり。ほぼ五三をいひてもつて義意を示さん。一には外道の相善、菩薩の法を乱る。二には声聞の自利、大慈悲を障ふ。三には無顧の悪人、他の勝徳を破す。四には顛倒の善の果、よく梵行を壊る。五にはただこれ自力のみにして他力の持つなし。かくのごとき等の事、目に触るるにみなこれなり。たとへば陸路より歩行するはすなはち苦しきがごとし。〈易行道〉とは、いはくただ仏を信ずる因縁をもつて淨土に生ぜんと願すれば、仏の願力に乗りてすなはちかの清淨の土に往生することを得。仏力住持して、すなはち大乘正定の聚に入る。正定はすなはちこれ阿毘跋致なり。たとへば水路より船に乗りてすなはち樂なるがごとし」と。〔以上〕**)

問う。先に龍樹に依るは何。

答う。これに二[415b]あり。一に人に重ねるための故に。二に法に重ねるための故に。

初に人に重ねるとは、龍樹は楞伽の懸記<sup>2</sup>に奉ず（魏訳第九（十二）、唐訳第六（十八））。大乘の無上の法を宣説し、歡喜地を証して安樂國に生ず。外邪・異部・顯密の諸宗、悉くみな仰ぎ止む。

ここをもつて『讚弥陀偈』、その徳を嘆じて云く、

本師龍樹摩訶薩、形を像始に誕じて頽綱を理へ、  
邪扇を閑閉して正轍を開く。これ閻浮提の一切の眼なり。

伏して承るに尊、歡喜地を悟りて、阿弥陀に帰して安樂に生ぜり。

（乃至）南無慈悲龍樹尊、心を至し歸命し頭面をもつて礼したてまつる。

その崇重の至は世尊と斉し。今先に依るはまた宜しからずや。

次に法に重ねるとは難易の判。勝劣の旨、廢立の宗なり。二信の到。三國の服承、百代の衣服、いわんやまた弥陀章および十二礼等、その讚揚する所、全く一論と同じ。広く山懸（※楞伽山の懸記か）の録のごとし。

当に知るべし、南北の空有、その積異なるといえども、内鑑は冷然、終歸全同なり。故に下文に云く、

龍樹菩薩と婆薮槃豆菩薩の輩、彼に生ぜんと願ずればまさにこれをなすのみ（私集八義、翼六義、多く貪りてかえって陋し。二義の義で足る）。

「謹しみて」とは慎なり、恭なり。

「按ずるに」とは考驗なり。

「龍樹」とは、本典（漆函に入る（※？））及び付法伝（集函等に入る）のごとし。

\*『楞伽經』卷九で、釈尊が将来の龍樹菩薩の出現を預言されているので「楞伽懸記（りょうがけんぎ）」という。

懸記の《懸》は「かける」という意味もあるが、ここでは懸絶、懸隔の意で、遠く隔たった時間、未来のこと。《記》は、「しるす」という意で『楞伽經』に托した、釈尊の預言（予言という、ある事についてその実現に先立って予測するという意味ではなく、あらかじめ言（ことば）を措定しておくという意）をいう。

「十住」等とは、『大不思議論』十万頌、衍中えんの一分。耶舎三藏誦出す。羅什これを訳す十六卷。纔わづかに第二地にいたる。『探玄記』(第一)及び『華嚴伝』等のごとし。

「阿毘」等とは、これ不退転を云う。具さに二途あり。一は通途、二は不共。

初の通途とは、且く『妙句』二の二(六)及び『浄名疏』(四十二)等の意に依る。見思を破して位不退、塵沙を破して行不退、無明を破して念不退等なり。

二に不具とは[416a]、定聚の異名。願に「不住定聚」と云い、経に「正定之聚」と云うこれなり。

問う。かくのごとき二釈、同たり異たり。

答えて云々。

「難行道」とは、『易行品』に云く、

仏法に無量の門あり。世間の道に難あり易あり。陸道の歩行はすなはち苦しく、水道の乗船はすなはち樂しきのごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便易行をもつて疾く阿惟越致に至るものあり。

難は平声の虚字。行は進趣に名く。これ能所に通ず。謂く進趣すべかり難きの道なり。易行の道は准じて解し知るべし。

問う。華嚴の何処に易行を説くや。

答う。十地品は諸仏の教道、これを難行となす。行願品は、超偏の妙益、これを易行となす。何ぞ必ず拘拘こうこうとしてこれを章句の間に求めんとす。

「五濁」とは、『小経疏』のごとし。「世」はこれ時とただこれ互いに挙ぐ。五濁は根劣に約す。

「無仏」とは、世降に約す。西河の二由全く承る者なり。

「この難」等とは、事は一二にあらず。故に「多途」と云う。『瑜伽』四十八(二十八)に十二種の艱難の事を説く(『善戒経』九、『地持経』八、全く同じ)。『宝女所問経』(大集経宝女所問品全く同じ)四(十三紙)に十三の罣礙(※覆うもの) 塹路を明かす(弥勒所問経論第一(十二紙)引用)。これ等の諸文今と趣同じ。また『十住論』の調伏心品の説、失菩提心の二十



法なり。次に阿惟越致相品に七種の敗壞の相を明かす。あわせてこれ等を取るが故に「多途」と云う。

「粗」とは略なり。

「五三」とは詩の「小星」に謂く、「かの小星嘽、三五東にあり」と。註に「三五はその稀を言う」と。『大悲経』五(十三)に云く、「三五の法を説く」と。

「一者」等とは、外道とはこれ二義あり。

一に「外の道」。『維摩義記』(浄影)に云く、「法外の妄解これを外 [416b] 道と称す」と。

二に「道を外す」。『三論玄義』(嘉祥)に云く、「心を道外にて遊ぶ。故に外道と言う」と。

「相善」とは有相の善。

「菩薩法」とは『十住論』四(八)に云く、

菩薩は我を得ず(一)、また衆生を得ず(二)、分別して法を説かず(三)、また菩提を得ず(四)、相をもって仏を見ず(五)、この功德をもって大菩薩と名づくるを得て、阿惟越致を成ず。

当に知るべし、菩薩はいやしくも相を取らば、その法を乱失す。

「二者」等とは、『易行品』に云く、

もし声聞地、および辟支仏地に墮するは、これを菩薩の死と名づく。すなはち一切の利を失す。

「三者」等とは、「無顧」とは経(※大経・五悪段)に云く、「義なく礼なくして「わが身を」顧み難るところなし」と。『十住論』四(三)に云く、「心の端直せず者、その性は諂曲(※自分の気持ち<sup>てんてい</sup>をまげて人にこびへつらうこと。また、そのさま)、喜んで欺誑を行ず」等これなり。

「破他」等(※他の勝徳を破す)とは、これ二意あり。

一つに彼は悩害を加う。提婆師子をして横難を被らしむがごとき等これなり。二つにかの弊悪に由り、菩薩は大慈を失す。身子の退縁(※乞眼の因縁)等のごときこれなり。

「四者」等とは、「顛倒」とはいわゆる人天の果法、人天の諸善、もしは



因もしは果、みなこれ顛倒これなり。「梵行」とは清浄行なり。妙莊嚴王（※『法華経』『妙莊嚴王本事品』に出る国王）の縁等のごとし。

「五者」等とは、上四の別相。今一は総相。また可なり、前四は集後の由にあたり、後一は集初の由にあたる。

問う。かくのごとき五難、次序いかに。

答う。右に四義を述ぶ。一に総別義（前四・後一）、『忠記』の意。二に浅深義（一は外道、二は小乗、三四は凡夫、前四は浅小とす。五は大乗。後一は深とす）。『翼解』の意。三は自他義（前三は他壞。第四は自壞。第五は無助共壞）。『刪捕』の意。四に有濁無濁義（前四は有濁、後一は無仏）。『私集義記』等の意。

更に一解を述ぶるに、前四は別とし、後一を総とす。別に生起あり。[417a] 第一（菩薩）は智を障ぎる。第二（菩薩）は悲を障ぎる。第三（衆生）、四は巧方便を障ぎる。智は順境において、悲は違境において、違順境において悲智双運す。これを方便という。正直はこれ智、外己はこれ悲（※正直を「方」といふ。外己を「便」といふ。正直によるがゆゑに一切衆生を憐愍する心を生ず。

外己によるがゆゑに自身を供養し恭敬する心を遠離す）。双運は「※辞書を」見るべし。かくのごとき諸難、他「※力」の持つなきに由る。総別と知るべし。かくのごとく解する者、善く次下の離順諸門の意に順うなり。

「如斯」等とは、梁の『武孝思賦』に云く「触目感傷」と。

「譬如」等とは、喩顯と知るべし。対文の五事、みなこれ苦相。一は邪途、二は小途、三は群狡、四は遊戯、五は単独なり。

「易行道」とは称名易行。『礼讚』に云く、

まさしく称名は易きによるがゆゑに、相續してすなはち生ず。

行巻（三十九）に云く、

行の一念といふは、いはく、称名の遍数について選択易行の至極を顯開す。

けだしこの旨を述ぶるなり。しかるにこの称名、本無上の信心に依止し生ず。故に信方便易行と云う。また云く「信心清浄なるもの」と。また云く「信仏因縁」等と。これはこれ所謂、「信一念とは信樂開發の時尅の極促」の者

なり。

「但」の字を見るべし。唯はこれ信仏業乃(※事か)成弁なり。

「信仏因縁」とは、至心信樂なり。至心は尊号を体とする故に。云く仏の光明を信じ縁となし、名号を因となす。所謂「光明・名号の因縁を顕す」の者ことなり。

「願生浄土」とは、欲生心なり。

「乗仏願力」とは不虛作住持の相なり。

「便得往生」とは、彼土入証の宗なり。

「かの清浄の土」とは、一法句清浄句、広略相入の境なり。

「即入大乘」等とは、速得不退、義は現未に通ず。經に云く「即ち往生を得て不退転に住す」これ [417b] なり。

「正定」等の義、『讚偈録』のごとし。具に『無上經』上(十三)『瑜伽』六十四及び一百等の説のごとし。文に「即」「便」と云い、また「乗」「持」と云う。ただこれ語便にして別義あることなし。二往生のごときはこれ別途のみ。

「譬如」等とは、またこれ喩頭。自ら衆難を絶つ。前に反して解すべし。

## 二に会義

### 此中難行止其意是同

(このなかの難行道は、すなはちこれ聖道門なり。易行道は、すなはちこれ浄土門なり。難行・易行、聖道・浄土、その言異なりといへども、その意これ同じ。)

文意解すべし。

二に二師に例同す。

### 天台迦才同之応知

(天台・迦才これに同じ、知るべし。)

文意解すべし。

三に兼ねて慈恩を挙ぐに二。初は引文。二は会義。今は初。

## 又西方要決止栖心淨域

(また『西方要決』にはく、「仰ぎておもんみれば、釈迦、運を啓けて弘く有縁を益す。教、随方に聞けてならびに法潤に霑ふ。親しく聖化に逢ひて、道、三乗を悟りき。福薄く、因疎かなるものを勧めて浄土に帰せしめたまふ。この業をなすものはもつばら弥陀を念じ、一切善根、回らしてかの国に生ず。弥陀の本願誓ひて娑婆を度したまふ。上現生の一形を尽し、下臨終の十念に至るまで、ともによく決定してみな往生を得」と。「以上」)

また同じき後序にはく、「それおもんみれば、生れて像季に居して、聖(釈尊)を去ることこれはるかに、道、三乗に預かりて契悟するに方なし。人天の兩位は躁動して安からず。智博く情弘きものは、よく久しく処するに堪へたり。もし識痴かに行浅きものは、おそらくは幽途に溺れん。かならずすべからく跡を娑婆に遠くして心を淨域に栖すましむべし」と。(以上)

「啓運」は時に約し、「教闡」は処に約す。

「親逢」等とは聖道の得益、「福薄」等とは浄土の得益なり。

「作此」等とは、専念は正業、回生(※「一切善根、回らしてかの国に生ず」)は助業なり。

「弥陀本誓」とは、すなわち第十八願なり。

余の文は準じ解す。

「生居」等とは、その師は唐の貞観五年をもって誕生す。すなわち如来滅後一千五百八十年にあたり、今「像季」というは、正像各千説に依るのみ。

「道預」等とは、三乗の得益。「人天」等とは、世間の得益。「若識」等とは、浄土の得益。この中の義趣、逆意にこれを取る。

二は会義。

[418a]

## 此中三乗止其意亦同

(このなかの三乗はすなはちこれ聖道門の意なり。浄土はすなはちこれ浄土門の意なり。三乗・浄土、聖道・浄土、その名異なりといへども、その意また同じ。)

文意解すべし。

三に結勸に三。初に正しく示す。二に例を挙ぐ。三に結。今は初。

### 浄土宗<sup>止</sup>帰於浄土

(浄土宗の学者、先づすべからくこの旨を知るべし。たとひ先より聖道門を学する人といへども、もし浄土門にその志あらば、すべからく聖道を棄てて浄土に帰すべし。)

文意解すべし。

二に引例

### 例如彼<sup>止</sup>弘西方行

(例するに、かの曇鸞法師は四論の講説を捨てて一向に浄土に帰し、道綽禪師は涅槃の広業を開きてひとへに西方の行を弘めしがごとし。)

二師の帰西、具さに諸伝のごとし。和讃に云々(四論の講説さしをきて等。本師道綽大師は等云々)。全くこの旨を述するなり。

三に正結

### 上古賢哲<sup>止</sup>寧不遵之哉

(上古の賢哲なほもつてかくのごとし。末代の愚魯むしろこれに遵はざらんや。)

文意解すべし。

三に血脈を明かすに二。初に他を挙げて今を問う。二に他に順じて今を答う。今は初。

### 問云聖道<sup>止</sup>血脈譜乎

(問ひていはく、聖道家の諸宗おのの師資相承あり。いはく天台宗のごときは、

慧文・南岳（慧思）・天台・章安・智威・慧威・玄朗・湛然、次第相承せり。真言宗のごときは、大日如来・金剛薩◆・龍樹・龍智・金智・不空、次第相承せり。自余の諸宗またおのおの相承の血脈あり。しかるにいまいふところの浄土宗に師資相承の血脈の譜ありや。）

「師資」とは、語は『老子』に出づ。云く、「善人は不善人の師、不善人は善人の資」と。

「如天」等とは、『統紀』等のごとし。

「如真」等とは、『稽古略』等のごとし。

「自余」等とは、華嚴・仏心等を等しく取る。

問う。何ぞ台密の二宗に止めるや。

答う。ただこれ存じて略するのみ。ある可は（※原文は「或可」。一つの可能性としては」という意味か）、上に「密大」及び「実大」等を云うが故にある可は、相承義類故に（多義云々。采録に足らず）。

「血脈の譜」とは、『説文』に、「脈は血の理の分、衰しや（※邪。正しくない）に体中に行く者」（※）。積して名づけば脈は幕なり。幕は絡と一体なり。譜は世系。

二に他に順じて今を問うに二。初は総。二は別。今は初。

[418b]

### 答曰如聖止等是也

（答へていはく、聖道家の血脈のごとく浄土宗にまた血脈あり。ただし浄土一宗において諸家また不同なり。いはゆる廬山の慧遠法師、慈愍三蔵、道綽・善導等これなり。）

浄土の相承におよそ三家あり。一に廬山家。二に慈愍家。三に道綽善導家。初に廬山家は、慧法師自ら解して諸三昧中、念仏独り功高くし、廬阜に結社し、六時に礼念す。劉雷等十八賢及び百二十三人等、皆当時の有名なる高輩なり（『統紀』二十七、『蓮宗宝鑑』に云々）。『樂邦文類』三に云々（天台、南山、達磨、慧遠の四哲並べて挙ぐ）。

次に慈愍家は、慧日を号す義浄三蔵を師とす。自ら船に浮し天竺に至る。

偏に三蔵を諳し、みな浄土を示す。さらに健駄羅国の観音像を祈り、親しく現身を感じず。遇摩頂にて念仏の法門の諸行に超過するを示し、東じて長安に帰す。大いに道俗を誘う。唐の玄宗開元七年なり。帝、号慈愍三蔵を賜る(『統紀』二十八、戒珠伝等)。

二に別に二。初に『安樂集』に依る。二に高僧伝に依る。今は初。

## 今且依止法上法師

(いましばらく道綽・善導の一家によりて、師資相承の血脈を論ぜば、これにまた両説あり。一には菩提流支三蔵・慧鸞法師・道場法師・曇鸞法師・大海禪師・法上法師。「以上、『安樂集』に出でたり。」)

「菩提留支」は、魏に道希と言う。北天の竺人。魏の永平初、来りて東夏に遊ぶ。永寧寺に処す(統高僧伝等に云々)。

慧鸞・道場・大海三師は本伝にいまだ詳らかならず。

曇鸞法師は知るべし。

法上法師は、『安樂集』に云く、「斉朝の上統」(※第四大門)と。すなわち北斉なり。上統とは僧官。『統紀』三十九(十七)云く、「北斉の文宣帝、天保二年、詔して昭玄十統を置く。沙門法上をもつて大統と為す」等と。三国縁起に云く、「斉朝の合水寺の法上は、地論涅槃の高徳なり」等と。具さに『統僧』十(六紙)の載のごとし。

[419a]

二に高僧伝に依る

## 二者菩提止小康法師

(二には菩提流支三蔵・曇鸞法師・道綽禪師・善導禪師・懷感法師・小康法師。「以上、唐・宋両伝に出でたり。」)

懷感は、具さに『宋高僧伝』六(二紙)の載のごとし。

小康は、具さに『宋高僧伝』二十五(二紙)、『樂邦文類』三(二十七)等の載のごとし。

問う。上來三説(※浄土三家か)、何ぞ取捨せざる。

答う。初開は他に対す。ただ多くこれ可なり。いまだ精檢を違あわてず。あに取捨なけんや。『漢語灯』九に五祖伝を列す。また『絵詞伝』六の載に依る。重源は入唐し、上人の命にて五祖の影像を求む。重源得て来る。今なお二尊院に存在す。

問う。今家はただ三師を取るは何。

答う。感師は少疵あり。『集』の終わりの述のごとし。康師はこれ終南の後身。故に別挙せざるのみ。余に呉録のごとし。因談(?) 『二蔵頌義』に云く、

方に今我が高祖、源空上人和尚、建暦元年辛未八月上旬、衆に示して曰く、「もし浄土宗において修学の志ある人は、諸師中において選んで三師の釈義に帰すべし。その三師とは、一に北魏の大巖玄中曇鸞玄簡菩薩大和尚。二に唐朝の西河道綽禪師大和尚、三に唐朝の終南悟真光明善導大師浄業大和尚これなり」と。諸師みな浄土の章疏を造るといへども、鍊磨本宗の情を掲げ、宗宗格別の名目を和らぐ。苟も依宗教別の道理を泥し、依教分宗の意趣を弁ぜず。この故に今略して三師釈義の趣を示すのみ。(唯浄記六(四十三丁)これを引く)

ここによりてこれを観ず。鎮家の所伝、全く三師に依るのみ。

[419b]

二に二行章に二。初は標章。二に引文。今は初。

### 善導和尚止正行之

【2】善導和尚、正雜二行を立てて、雜行を捨てて正行に帰する文。

今章の来意、上の二義に準ず。もし文に約せば、師説に依る中、西河これ師、終南これ資。次に叙するに知るべし。もし義に約せば、広より狭に之く。上すでに聖を捨て浄に帰す。今はまさに浄の中より雜を捨て正に帰せんんとす。故にこの章来る。

二行章とは、あるいは(決疑)「捨雜歸正篇」と云い、あるいは(鶉木)「專雜二行章」と云い、あるいは(大綱)「大雜二行篇」と云い、あるいは(聞香本義私集要義)「正雜行章」と云う。大義皆同じ。今は略に従うのみ。

「善導」等とは、能立の人を挙ぐ。具さに『続僧伝』三十七（二一二）、『瑞応伝』、『新修伝』、『念仏鏡』、『浄土文』（已上五部『漢語灯』九に載す）、『樂邦文類』三（三十五）、『蓮宗宝鑑』四、『仏祖統紀』二十七及び八、『浄土指帰』下、『諸上善人詠』等に載す（一人二人、文軌下（十九）会して一人となす）。

「和尚」とは、あるいは和上。尚上互通。『寄帰伝』に云く、「鄒波陀耶」と。これ親教師と云う。よく教えに由て世業を離れ出るが故に。和尚に二種あり。一に親教師、すなわち受業、二に依止、すなわち稟学なり。

「立正」等とは、所立の行を明かす。

「而捨」等とは、廢立を云うなり。所謂、二重選択なり。『決疑』二（初）に云く、

問う。雑行を捨てるとは、その雑行浄土に生ぜざるがためか。

答う。伝に云く、正雑二行同じく往生を得るなり。同生を得るといへども、しかして雑行は弱く正行は強し。今、下機に望んで、恐らくは生じ難きが故にしばらく捨てて行ぜず。堪能の機に対しては生ぜざるにあらざるなり。

弁じて曰く、甚だしき、鎮西の正義に暗きなり。もしこの判に依らば、別願に[420a]何の功あり。云何が正義とす。かの諸行のごときは、回向して生を得べきといえども、千にして五三、百にして一二を得る。すべて疎雑の行と名く。故に報土の真因にあらざるなり。故に千中無一、萬不一生と云う。捨てざるべからざるは、このための故なり。

二の引文に二。初は正しく二行を明かす。二に重ねて得失を判ず。初の正しく二行を明かすに二。初は正引、二は私釈。初の正引に二。初は標、二は釈。今は初。

## 観經疏止二者雜行

（『観經疏』の第四（散善義）には、く、「行につきて信を立つといふは、しかも行に二種あり。一には正行、二には雑行なり。」）



今章は祖判を挙げて相檢す。その五異あり。一に隱頭判積異、二に行修同別異、三に正業簡不異、四に相對開合異、五に得失通局異。

初の隱頭判積異とは、今章は隱頭を論ぜず、直ちに判積を施す。意は隱意あり。高祖はしからず。「化土」本及び『禿鈔』下、頻りに隱頭を判じ、信本（八紙）には就人立信積を引いて竟り、「乃至」の言を置き、次に「また就」已下の文を引く。これはこれ章を裁き義を判ずるなり。頭説に属するをもつて真實卷には引かず、故に化土本（十紙）に全引す。『禿鈔』下（十一）には五正行・六一心・六專修を明かすは、旨全く相同す。果は頭説に属す。化土卷に引くが故に。要を取りてこれを言はば、もし信後に約せば、総じてこれ報恩の経営なり。もし信前に約せば、種種の差別なきにあらざるものなり。旨を得て知るべし。

二に行修同別異とは、今章は行を所行に属し、修は能修に属す。結文に云く、「あに百即百生の專修正行を捨てて、堅く千中無一の雜修雜[420b]行を執せんや」と。文に在りて見るべし。高祖はしからず。「化土」本（十五）に云く、「それ雜行・雜修、その言一つにして、その意これ異なり」等と。『禿鈔』末に云々。意全く相同す。また和讃に云々。ないし広説す。

三に正業簡不異とは、今章の所詮は、ただ正定の業を止む。もし密意に依らば、あに簡択の文なきや。「順彼仏願故」と云うが故に。また「必為信心為能入」と云うが故に。しかりといえども言詮に在りては簡ぜざるものなり。高祖はしからず。明了に簡択す。『法要』七（三十二）（云々）（正行五種のうちに第四の称名をもて正定業とすくり（※選り）とり、余の四種をば助業といえり。正定業たる称名念仏をもて、往生淨土の正因とはからひとつのるすら、なをもて凡夫自力のくはだてなれば、報土往生かなふべからずと云々）。信心為本はすなわちこの旨なり。

四に相對開合異とは、今集はただ五番の相對をなすを、高祖は拡充す。『禿鈔』には法に四十二対を作り（行卷四十八）、機に十八対を作る。開合知るべし。

五に得失通局異とは、今集は專雜の得失を判じ、ただ要弘の二門に局る。高祖はしからず。更に真門に開く。その得失に至りて、真要一具、義を先んじ文を後にす。その旨塞ぐことなし。これはその大者、小者推すべし（?）。

「觀經疏」は、四帖これなり。

「第四」は散善義を指す。

「就行」等とは、三心積中、深心に就いて二積あり。一に就人立信、二に

就行立信。今その一なり。余の文は下のごとし。

二に釈に三。初に正行、二に雜行、三に得失。初の正行に二。初に総じて正行を明かす。二に助正を分別す。初の総じて正行を明かすに三。初に標、二に徴、[421a]三に列。今は初。

### 言正行者止是名正行

(正行といふは、もつぱら往生の經によりて行を行ずるもの、これを正行と名づく。)

「行を行ずる」とは古来、二点。一に云く、上は能行となし、下は所行となす。二に云く、これを反す。今謂く、並んで通ず(※註釈版は「往生の經によりて行を行ずる」だが「行ぜし行」ともよめる)。下の行は後の雜行の文に准じ、初を以つて正となすのみ。

「往生經」とは、三部を指すなり。余文は解すべし。

二に徴

### 何者是也

(いづれのものかこれや。)

この義は至要。故に徴にしてこれを発す。

三に列。自ら五。知るべし。

### 一心専読止是名為正

(一心にもつぱらこの『觀經』・『弥陀經』・『無量壽經』等を読誦し、一心にもつぱら思想を注めてかの国の二報莊嚴を観察し憶念し、もし礼せばすなはち一心にもつぱらかの仏を礼し、もし口称せばすなはち一心にもつぱら讚歎供養す。これを名づけて正となす。)

「一心」とは帰依一心。すなわち他力の金剛一心なり。

「専誦」等とは、報恩の経営。信後の妙行なり。

「読誦」とは、妙句に云く、「文を見るを誦となす。忘れずを誦となす」と。すなわちこれ読誦正行。下に具さに釈すがごとし。

「專注」等とは、心を一境に住すを專注となす。すなわち定なり。心をして造作ならしめるを思をなす。境において像を取るを想となす。観察とは慧をもて体となす。『論註』に云く、「心にその事を縁ずるを「観」といふ。観心分明なるを「察」といふ」と。明記して忘れざるを憶となす。

「念彼国」等とは、二浄三嚴等なり。すなわちこれ觀察正行。下に具さに釈すがごとし。

「若礼」等とは、すなわちこれ礼拝正行。

「若口」等とは、すなわちこれ称名正行。

「若讚」等とは、すなわちこれ讚嘆供養正行。

「讚」は謂く讚揚。「嘆」は謂く歌嘆。「供」は下に以つて上を薦す。「養」は卑をもつて貴を資す。近くは『珠林』五十四（一）供養篇のごとし。

問う。五正五[421b]念、同異いかん。

もし信後に約さば、全く同じにして異にあらず。もし信前に約さば、差別なきにあらず。五念は必ず信後にあり。五正は通じて前後あり。もしその信前の失の有無の量は化土卷等のごとし。しかるに今『集』のごときは意に隱意あり。異論すべからず。今家はしからず。次上に弁ずるがごとし。

二に助正を分別す

### 又就此正<sub>止</sub>名為助業

（またこの正のなかにつきて、また二種あり。一には一心にもつばら弥陀の名号を念じて、行住坐臥時節の久近を問はず念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるがゆゑに。もし礼誦等によるをすなはち名づけて助業となす。）

「一心専念」等とは、この文廢立専念の極致、浄教の根基なり。『聖覚記』に云く、「前後八遍、一心専念の文に至る。正しく素意を解す」（云々）。『和語灯』五（二十四左）云々（これ三学の外に、我心に相応する法門ありや。

わが身に堪たる修行やあると。よろづの智者にもとめ、もろもろの学者にとぶらひしに、教る人もなく、示す輩（ともがら）もなし。然間なげきなげき経蔵に入る。かなしみかなしみ聖教に向て、手づから身づから披見せしに、善導大師の『観経の疏』に云く、「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住座臥、不問時節久近、念念不捨者、是名正定之業。順彼仏願故」と云う文を見て後、我等がごときの無智の身は、偏に此文を仰ぎ、専ら此理を憑て、念念不捨の称名を修し[422a]て、決定往生の業因をそなふべし等（浄土真宗全書六・六〇八）、あに簡要にあらざと曰うか。

「一心専念」とは、行巻（三十五）に、

「専心」といへるはすなはち一心なり、一心なきことを形すなり。「専念」といへるはすなはち一行なり、二行なきことを形すなり。

『法要』二の二（十七紙右）、『一念証文』云々（一心専念は、一心は金剛の信心なり。専念と云は一向専修なり。一向は余の善にうつらず、余の仏を念ぜず、専修は本願のみなを、ふたごころなくもつばら修するなり）。

上に専称と云い、今は専念と云う。念声は一にして異解すべからず。『法要』二の二（六十三左）、『唯信文意』云々（念と声とひとつこころなり。念をはなれたる声なし。声をはなれたる念なしとするべし等）。

「一心」すなわこれ帰命の一念、「専念」すなわちこれ報謝称名なり。

「行住」等とは、威儀を簡ばざるを顕す。

「不問」等とは、時節を論ぜざるを示す。

「念念」等とは、念報相続相を明かす。

問う。一時煩惱百千間。何ぞ念念不捨を得るや。

答う。この謂いにあらず。念報称名、初後不二。これを念念不捨と謂うなり（今家は訓を借り義を詮ずる例あり。しかれば「化土巻」及び『証文』等。その義を見ず。他流は多義。強いて深解を求むれば却つて非なり）。

「是名」等とは、如来選定の業故、あるいは可。正故に邪定にあらず。定故に不定にあらず。正はこれ正定聚の業故に。『法要』一の一（五十三）云々（正定の因というは、かならず無上涅槃のさとりをひらくたねともうすなり）。同一の二（十八紙）、『一多証文』云々（弘誓を信ずるを、報土の業因とさだまるを正定の業となづくといふ。仏の願にしたがうがゆえにともうす文なり）。

「順彼仏願故」とは、称名の正業たりしの由を積すなり。順は謂く随順。すなわち随順等（第か）十八願なり。已上積文、全く願意を顯す。

「一心」とはすなわち三信なり。

「專念」とはすなわち十念なり。

「行住」等[422b]とは、「乃」は乃至に当る。

「正定の業」とは、「若不生者」の誓約に由るが故に。

「若依」等とは觀察讚供を取りて、これは正定の業にあらざるが故に助業と云うなり。その細判に至れば、具さに下に弁ずるがごとし。

且く異流を挙ぐ。『決疑』二（四）に云く、

一心等とは、総じて常念の相を明かす。行住座臥等とは、別して常念の相を積す（云々）。

弁じて曰く、一心專念をもつて常念相続の相となすは、源流を弁ぜず。迂遠と謂うべし。

また云く、「行住座臥は各々久近あり」等と。

弁じて曰く、迂遠甚だし。

また云く、「念念不捨とは、これ行者の用心意樂」等と積す。

弁じて曰く、自力策励なり。かの家の常態のみ。

『私集鈔』二（四）云く、

一心は安心、專念は起行作業、（乃至）念念不捨は、この文を付して多義あり。具さに七義を出す（云々）

弁じて云く、專念をもつて作業となすは非なり。

七義中について第一は鎮西義（上に已に破すがごとし）。

第二の東山義に云く、「随犯随懺故に。後念の前念に続く」等とは、またこれ策励。

第三の西山義に云く、「行者の念念にあらす。仏の念念不捨とは強く他力義を為すを求める」とは、附会甚だし。

第四（深草）義に云く、「上の念は生に約し、下の念は仏に約す」とは、文理通らず。全く憶測のみ。

第五（竹林寺）義に云く、「煩惱の間に起きるといへども、一得業成にて、

永く捨失せず」とは、この釋好し。しかれどもその安心はなおこれ自力なり。第六の円福寺の道意の義に云く、「念念はすなわち三性の念、帰仏を捨てざる」等。弁じて曰くこの釋好し。しかれどもその安心はなおこれ自力なり。

第七に円福寺の頓乗の義に云く、「念念の言はすなわち行【423a】とは帰行念念なり。境に対して三性の心を雜起すといえども、しかして内に信心を得るが故に、時時の称名念仏、後念は前念に繼ぐ。故に念念不捨者と云う」等。弁じて曰く、今家に似たりと雖も、なおこれ自力。鎮の積義、略述すればほぼしかり。

『六要』三本（十一）に二義あり。後義をもつて本となす（云々）。あるいは評して初義は鎮西に同じ。後義は竹林寺に同じ（云々）。今は謂く然らず。ただ釈は相類のみ。他流の義に同ずるがごとし。自力策励を免れざるが故に。積相をもつて同異を論ずるべからざるなり。

## 二に雜行

### 除此正助<sup>止</sup>悉名雜行也

（この正助二行を除きてのほかの自余の諸善をことごとく雜行と名づく。）

雜行とは、諸善万行にて純極樂の行にあらざるが故に。「化土」本（十五）に云く、

雜の言において万行を撰入す。五正行に対して五種の雜行あり。雜の言は、人・天・菩薩等の解行、雜せるがゆゑに雜といへり。もとより往生の因種にあらず、回心回向の善なり。ゆゑに淨土の雜行といふなり

## 三に得失

### 若修<sup>止</sup>名疎雜之行

（もし前の正助二行を修すれば、心つねに「阿弥陀仏に」親近して憶念断えず、名づけて無間となす。もし後の雜行を行ずれば、すなはち心つねに間断す。回向して生ずることを得べしといへども、衆く疎雜の行と名づく」と。）

已下はその得失を判ず。具さに下に明かすがごとし。

選択集通津録卷一（終）

[423b] 選択集通津録卷二

芸州報専寺 慧雲著

二に私積に二。初は積文。二に示例。初の積文に二。初は総分。二に別積。今は初。

私云就此<sup>止</sup>二行得失

（わたくしにいはいはく、この文につきて二の意あり。一には往生の行相を明かす。二には二行の得失を判ず。）

文意見るべし。

二の別積に二。初は往生の形相を明かす。二は二行の得失を明かす。初の往生の形相を明かすに二。初に二種を標す。二に二種を積す。今は初。 - 60 -

初明往生<sup>止</sup>二雜行

（初めに往生の行相を明かすといふは、善導和尚の意によらば、往生の行多しといへども大きに分ちて二となす。一には正行、二には雜行なり。）

文意見るべし。

二に二種を積すに二。初は正行。二は雜行。初の正行に二。初は開合を標す。二に開合を積す。今は初。

初正行者<sup>止</sup>合為二種

（初めの正行とは、これにつきて開合の二の義あり。初めの開を五種となし、後の合を二種となす。）



文意見るべし。

二に開合を釈すに二。初は開。二は合。初の開の中に二。初は標。二は釈。今は初。

釈の中に三。初は開中の合。二は開中の開。三は結。初の開中の合に五。上に准じて見るべし。

### 初開為五種止為正是也

(初めの開を五種となすといふは、一には読誦正行、二には觀察正行、三には礼拝正行、四には称名正行、五には讚歎供養正行なり。)

第一の読誦正行は、もつぱら『觀經』等を讀誦するなり。すなはち文(散善義)に、「一心にもつぱらこの『觀經』・『弥陀經』・『無量壽經』等を讀誦す」といふこれなり。第二に觀察正行は、もつぱらかの国の依正二報を觀察するなり。すなはち文(同)に、「一心にもつぱら思想を注めてかの国の二報莊嚴を觀察し憶念す」といふこれなり。第三に礼拝正行は、もつぱら弥陀を礼するなり。すなはち文(同)に、「もし礼せばすなはち一心にもつぱらかの仏を礼す」といふこれなり。第四に称名正行は、もつぱら弥陀の名号を称するなり。すなはち文(同)に、「もし口称せばすなはち一心にもつぱらかの仏を称す」といふこれなり。第五に讚歎供養正行は、もつぱら弥陀を讚歎供養するなり。すなはち文(同)に、「もし讚歎供養せばすなはち一心にもつぱら讚歎供養す、これを名づけて正となす」といふこれなり。)

文に配して見るべし。

二に開中の開

[424a]

### 若開讚嘆止六種正行也

(もし讚歎と供養とを開して二となさば、六種正行と名づくべし。)

文意解すべし。

三に結



## 今依合義故云五種

(いま合の義によるがゆゑに五種といふ。)

文意解すべし。

二に合に二。初は標、二は積。今は初。

## 次合為二止二者助業

(次に合を二種となすといふは、一には正業、二には助業なり。)

文意解すべし。

二に積に三。初は正業、二は助業、三は重ねて正業を積す。今は初。

## 初正業者止願故是也

(初めの正業は、上の五種のなかの第四の称名をもつて正定の業となす。すなはち文(散善義)に、「一心にもつぱら弥陀の名号を念じて、行住坐臥時節の久近を問はず念々に捨てざるもの、これを正定の業と名づく。かの仏の願に順ずるがゆゑに」といふこれなり。)

文意解すべし。

二に助業

## 次助業者止助業是也

(次に助業は、第四の口称を除きてのほかの読誦等の四種をもつてしかも助業となす。すなはち文(同)に、「もし礼誦等によるをすなはち名づけて助業となす」といふこれなり。)

文意解すべし。

三に重ねて正業を積す

### 問曰何故止至下可知

(問ひていはく、なんがゆゑぞ五種のなかに独り称名念仏をもつて正定の業となすや。答へていはく、かの仏の願に順ずるがゆゑに。意はいはく、称名念仏はこれかの仏の本願の行なり。ゆゑにこれを修すれば、かの仏の願に乗じてかならず往生を得。その仏の本願の義、下に至りて知るべし。)

重ねて積す旨あり。後の人をして「順彼仏願故」の一句は直ちに千金と知らしめんと欲す。この章は第三章への楷梯の深義たり。故に問答し重積するのみ。

二に雑行に三。初に文を挙ぐ。二に略積。三に広積。今は初。

### 次雑行者止雑行是也

(次に雑行は、すなはち文(同)に、「この正助二行を除きてのほかの自余の諸善をことごとく雑行と名づく」といふこれなり。)

文意解すべし。

二に略積

### 意云雑行止不違具述

(意はいはく、雑行無量なり、つぶさに述ぶるに違あらず。)

化土巻に云く、「雑の言において万行を撰入[424b]す。五種正行(※原本…五正行。本派存如上人授与本は「五種正行」)に対して五種の雑行あり」(浄真全二・一九七)と。全く今と同じ。

三に広積に四。初は体を示す。二は数を示す。三は分積。四は余を撰す。今は初。

但今且<sup>止</sup>五種雜行也

(ただしばらく五種の正行に翻対してもつて五種の雜行を明かすべし。)

文意解すべし。

二に数を示す。

一 読誦雜行<sup>止</sup>供養雜行也

(一には読誦雜行、二には觀察雜行、三には礼拝雜行、四には称名雜行、五には讚歎供養雜行なり。)

文意解すべし。

三に分釈に自ずから五

第一 読誦<sup>止</sup>供養雜行

(第一に読誦雜行といふは、上の『觀經』等の往生淨土の經を除きてのほかの大小乘顯密の諸經において受持し読誦することごとく読誦雜行と名づく。第二に觀察雜行といふは、上の極樂の依正を除きてのほかの大小、顯密、事理の觀行をみなことごとく觀察雜行と名づく。第三に礼拝雜行といふは、上の弥陀を礼拝するを除きてのほかの一切の諸余の仏・菩薩等およびもろもろの世天等において礼拝恭敬することごとく礼拝雜行と名づく。第四に称名雜行といふは、上の弥陀の名号を称するを除きてのほかの自余の一切の仏・菩薩等およびもろもろの世天等の名号を称することごとく称名雜行と名づく。第五に讚歎供養雜行といふは、上の弥陀仏を除きてのほかの一切の諸余の仏・菩薩等およびもろもろの世天等において讚歎供養することごとく讚歎供養雜行と名づく。)

「第一」等とは、たとい傍依の諸經、西方を讚歎し、弥陀を称揚し、往生を記別すれども、ただ一機一縁となしてしかるのみなり。故にこれを読誦すれども、みな雜行に属す。

「第二」等とは、上に准じて解すべし。

「事理の観行」とは、九想八背捨等は事観となし、唯識真如等は理観となす。一切准じて解す。

「第三」等とは、准じて解すこと知るべし。

「第四」等とは、准じて釈すこと解すべし。

「第五」等とは、准じて解すこと知るべし。

四に余を撰す

### 此外亦有止雜行之言

(このほかまた布施・持戒等の無量の行あり。みな雜行の言に撰尽すべし。)

文意解すべし。

問う。上来の文意、並びにこの信後の妙行は、念報の経営なり。しかるに化卷・禿鈔、引弁に失多し。いかんがこれを通ず。

答う。向の所謂隱顕の判釈の異、これなり。それ終南は疏を製す。[425a]所釈なれば(？)隱顕あり。能釈もまた隱顕あり。淄・澠の合、易牙(？)これを分つ。水乳の和、鷺・鴨これを知る。元祖は知りて言わず。初開対外なり。高祖は承けてこれを判ず。後述対内なり。ここをもって今集はただ隱意を約し、宗祖のごときは顕意を判じ、信前・信後を檢択す。差別見るべし。問う。化卷に云く、「雜行雜修」と。意は異にして言は似る。しかれども疏および集、その判を見ず。いかんがこれを領す。

答う。向の所謂行修同別の異これなり。世人なお言く、「三代(夏・殷・周の三王朝)の礼樂(礼法や音樂)、周に至りて全く備わる」と。今またかり。終南はただ五正を判ずるのみ。元祖は加えて五雜をもつてす。ここにおいて正雜相對す。廢立の旨成ず。しかしてなおいまだ二力二土の細判に及ばず。西鎮の輩、鷓蚌(シギとハマグリ)相持し、勢死止まざらしめんに至る。あるいは文に執し義に背き(鎮西)、あるいは義について旨を迷す(西山)。その過祖判(以初為正)と違い経旨を失す(法蔵發願)の弊に至りておわぬ。

高祖はこの弊を愍ぜんがための故に、果に二土を判じ(西河・終南及び横川を承ける者なり)、因に二力を択ぶ(玄簡を承ける者なり)。因は二力の

差あるをもつての故に、果は二土の別あり。ここにおいてか文順義正なり。祖判はこれに立つ。経旨すなわち通ず。行修同異の則のごときは、その別支のみ。これを思え。向さきの所謂正業簡不さきの異、またこれ旨なり。

二に二行の得失を明かすに二。初に文を挙げて略示す。二に義に就いて広判す。今は初。

### 次判二行止即其文也

（次に二行の得失を判ぜば、「もし前の正助二行を修すれば、心つねに「阿弥陀仏に」親近して憶念断えず、名づけて無間となす。もし後の雑行を行ずるは、すなはち心つねに間断す。回向して生ずることを得べしといへども、衆く疎雑の行と名づく」（散善義）と、すなはちその文なり。）

文意解すべし。

[425b]

二に義に就いて広判するに二。初は標、二は釈。今は初。

### 按此文意止純雑対也

（この文の意を案ずるに、正雑二行につきて五番の相對あり。一には親疎対、二には近遠対、三には有間無間対、四には回向不回向対、五には純雑対なり。）

文意解すべし。

二に釈に五。初は親疎対、二には近遠対、三には有間無間対、四には回向不回向対、五には純雑対。今は初。

### 第一親疎対止名疎行也

（第一に親疎対といふは、先づ「親」といふは、正助二行を修するものは阿弥陀仏においてはなほだもつて親昵となす。ゆゑに『疏』（定善義）の上の文にいはいはく、「衆生行を起して心口につねに仏を称すれば、仏すなはちこれを聞しめす。身につねに仏を礼敬すれば、仏すなはち心こゝろにこれを見たまふ。心つねに仏を念ずれば、仏すなはちこれを知りたまふ。衆生仏を憶念すれば、

仏衆生を憶念したまふ。彼此の三業あひ捨離せず。ゆゑに親縁と名づく」と。次に「疎」といふは雑行なり。衆生仏を称せざれば、仏すなはちこれを聞きたまはず。身に仏を礼せざれば、仏すなはちこれを見たまはず。心に仏を念ぜざれば、仏すなはちこれを知りたまはず。衆生仏を憶念せざれば、仏衆生を憶念したまはず。彼此の三業つねに捨離す。ゆゑに疎行と名づく。」

五番の相對。第一・第二の借は定義（※頭注…私に云く「善」か）義。第三は礼讚。第四は玄義。取来抑揚す。第五の純雜、正しく今章を述べる。高祖は拡充し、行卷には、法に四十八対あり、機に十一あり。『禿鈔』には、法に四十二あり、機に十八あり。広略存没す。各々その旨あり。向のいわゆる相對開合異これなり。

「親昵」の昵とは、『韻会』に尼質の切。『説文』に曰く「近」なり。徐に曰く、「日々相近する」なり。

『疏』の上の文は定善義を指す。撰取章のごとし。

「衆生」等とは、衆生のすなわち身口意の三、仏のすなわち見聞知の三。『和語灯』二（十七）に云々（弥陀の本願は、決定成就して極樂世界を莊嚴したらば、御目をみまはして、我名を称する者やあると御覽じ、御耳を傾て我名を称する者をやあると、夜昼きこしめさるる也。されば一称も一念も、阿弥陀にしまれまひらせずといふことなし）。これはこれ元祖、今意を形容するなり。

自ら二意あり。一は事に約し、二は理に約す。

初に事に約せば、天眼遠見力。天耳遙聞力、他心徹鑒（※鑑の異体字）力故に。『語灯』の釈の「と」し。

次に理に約せば、心遍・身遍・無障礙なり（※法界の三義（註釈版七祖篇・四三一頁））。遍く故にあい捨離せざるものなり。

「憶念」とは恒時相続相。

「彼此」等とは見聞知、この彼の三業と、称礼念の此の三業と、[426a]須臾にあい離るべからざるなり。

問う。鸞師は云わざるか。「諸仏の三業莊嚴、畢竟平等にして、よく衆生の虚誑の三業を治す」等と。今何ぞ異なるや。

答う。異に似たれども全く同じ。彼は回施の本に約すが故に。此は撰化の末に約すが故に。本末初後、各々一義を挙げ、理実互成のものなり。まさに知るべし、その親は父子・夫婦のごとくにしかるなり。

次に「疎」とは一―これを反する。逆意見るべし。

二には近遠対

## 第二近遠<sup>止</sup>所引釈也

(第二に近遠対といふは、先づ「近」といふは、正助二行を修するものは阿弥陀仏においてはなほだもつて隣く近しとなす。ゆゑに『疏』(定善義)の上の文には「衆生仏を見んと願すれば、仏すなはち念に應じて目の前に現したまふ。ゆゑに近縁と名づく」と。次に「遠」といふは雑行なり。衆生仏を見んと願ぜざれば、仏すなはち念に應ぜず、目の前に現じたまはず。ゆゑに遠と名づく。ただし親近の義これ一に似たりといへども、善導の意分ちて二となす。その旨『疏』(同)の文に見えたり。ゆゑにいま引き釈するところなり。)

「先近」等とは、上は心の親に約す。今は身の近に就く。

「隣」は云く比隣。

「『疏』の上の文」は、次の上と同じ。

「但親」等とは、『疏』の文はすでに親近の二縁を分つ。故に今はこれを承けて、上と相望するに、自ずから四句あり。一は親にして近にあらず。譬えば父子の在す都の卑(※?)を越するがごとし。二に近にして親にあらず。譬えば怨讐密邇(※迹の異体字…ちかい)にして比隣のごとし。三にまた親また近。譬えば父子の同じく一室に居するがごとし。四に親にあらず近にあらず。行路人のごとし。今は第三句を取るのみ。

三には有間無間対

## 第三無間<sup>止</sup>間断是也

(第三に無間有間対といふは、先づ「無間」といふは、正助の二行を修するものは阿弥陀仏において憶念間断せず。ゆゑに「名づけて無間となす」といふこれなり。次に「有間」といふは、雑行を修するものは阿弥陀仏において憶念つねに間断す。ゆゑに「心つねに間断す」といふこれなり。)

「間」とは間隔の義（門隙に月を来すに象す。語に云く、「孝なるか**閔子騫**。人、その父母昆弟の言を聞せず」**（※『論語』先進第十一）**と。あるいはその病の間に等し。字義に知るべし）。

「憶念不断」とは、弘願の行人。妄念の雑といえども、しかして自力の念を離るるが故に。

「憶念間断」とは、雑修の人。頭然を救うがごとくして疑退心を懐く。旨を得てこれを領す。この文は下の『礼讚』中に十三**[426b]**失を明かすの文を借りて来る。文は憶想間断を云うが故に。

四には回向不回向対

#### 第四不回<sub>止</sub>得生是也

（第四に不回向回向対といふは、正助二行を修するものは、たとひ別に回向を用ゐざれども自然に往生の業となる。ゆゑに『疏』（玄義分）の上の文にはく、「いまこの『観経』のなかの十声仏を称するは、すなはち十願十行ありて具足せり。いかんが具足する。〈南無〉といふはすなはちこれ帰命、またこれ発願回向の義なり。〈阿弥陀仏〉といふはすなはちこれその行なり。この義をもつてのゆゑにかならず往生を得」と。〔以上〕次に「回向」といふは、雑行を修するものは、かならず回向を用ゐる時に往生の因となる。もし回向を用ゐざる時には往生の因とならず。ゆゑに「回向して生ずることを得べしといへども」といふこれなり。）

今この一対、『註論』より源じ、正しく「玄義」を承ける。至玄至要は行巻の『翼解』、五帖敷演す。みなここにあるのみ。先に回向の名義を釈し、しかして後に文について解釈す。

初めに回向の名義とは、解に二途あり。一は通途、二は不共。

初の通途とは、『義章』九（四右）の釈に云く、

回向と言うは、己の善法を回して、趣向する所あるが故に回向と名く。

回向同じからず。一門に三を説く。一に菩提廻向、二に衆生廻向、三に實際廻向等と。



謂く回因（善根）向果（菩提）を菩提回向と名く。これ上求菩提の相なり。回自（自己所修）向他（願以与他）を衆生廻向と名く。これ下化衆生の相なり。回事（有為善根）向理（平等実相）はこれ實際廻向の相なり。

次に不共とは、『論註』に回向門を釈して云く、「回向に二種の相あり。一つは往相、二つには還相」等と。これ論の所説の五因五果を総束し、二回向となす。もって衆生往生の因果を示すなり。しかればこの二回向、全く凡聖自力の回向にあらず。もと如来の願力回向よりして成就する所なり。その本は浄入願心章にあり。論のいわゆる三種成就の願心莊嚴これなり。もって弥陀成仏の因果を顕すなり。

問う。所依はいかん。

答う。経に云わざるか。「大莊嚴をもつて衆行を具足す」と。これ弥陀の発願なり。また云わざるか。「もろもろの衆生をして功德を成就せしむ」と。これ[427a]弥陀の回向なり。これはこれ弥陀の自力（発願）と利他（回向）円満の相なり。二浄三嚴はこれによりて成す。故に願心莊嚴と云う。もしは行、もしは信、もしは因、もしは果、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清淨願心の成就したまへる所にあらざることあることなきなり。また真実功德相および性功德を積する等はみなこの旨なり。玄義の稟承に六字積あり。今の所引はこれなり。文に云く、

南無といふは、すなはちこれ歸命なり、またこれ発願回向の義なり。（乃至）この義をもつてのゆゑにかならず往生を得。

行巻の釈に云く、「発願廻向といふは、如来すでに発願（自力）して衆生の行を回施（利他）したまふの心なり」と。行巻にまた云く、「明らかに知んぬ、これ凡聖自力の行にあらず。ゆゑに不回向の行と名づくるなり」と。知るべし。

次に文について解釈すれば、「縦令」等とは、雑行の必ず回向を用いるを簡ぶ。

「『疏』の上の文」とは、散善義を指す。

「十声」等とは『丁酉録』のごとし。

「次に回」等とは、文意を解すべし。

五の純雑対に二。初は正積、二は礼を挙ぐ。今は初。

## 第五純雜<sup>止</sup>修正行也

(第五に純雜対といふは、先づ「純」といふは、正助二行を修するものはもつぱらこれ極樂の行なり。次に「雜」といふは、これももつぱら極樂の行にあらず。人天および三乗に通ず、また十方浄土に通ず。ゆゑに雜といふ。しかれば西方の行者すべからず雑行を捨てて正行を修すべし。)

「純」とは純粹。『増韻』には不雜なり。

「雜」とは、説文には「五采の相合なり」と。

「先づ純」等とは、正しく当章に依りてこれを立つるなり。

問う。称名これ正定業。理は宜しく親近に等し。五義の前三後一は諸行法に通ず。何ぞ五義あらん。

答う。しかりといえども今これ導師は純なる浄土の行を選びてもって助業と名く。[427b]ならびにこれ信後の妙行。念報の経営。もって称名を助く。

正業を相従しまた五義を具す。もしそれ信前雑修の類は、五義を具せざるなりこと固し(※原文は「固矣」)。

二に举例に二。初に標。二に釈。今は初

## 問曰此純<sup>止</sup>其例非一

(問ひていはく、この純雜の義、經論のなかにおいてその証拠ありや。答へていはく、大小乗の經・律・論のなかにおいて純雜二門を立つること、その例一にあらず。)

五対中について、今この一对、正雜判において、はなはだ切要となす。故に特に問を設け例を引くのみ。

二の釈に二。初に内典。二に外典。初の内典に二。初は正挙、二に結示。初の正挙に二。初は顕教、二に密教。初の顕教に四。初は大乘、二に小乗、三に僧伝、四に義章。今は初

## 大乘即於<sup>止</sup>一藏是雜

（大乘はすなはち八蔵のなかにおいてしかも雜蔵を立つ。まさに知るべし、七蔵はこれ純、一蔵はこれ雜なり。）

「八蔵」とは、『菩薩処胎經』（五卷竺仏念訳）に出づ。一は胎化蔵（仏説胎中化現等事）、二は摩訶衍蔵（諸大乘經）、三は中院蔵（説中院事）、四は戒律蔵（僧祇事律部）、五は菩薩蔵（諸菩薩修因証果等法）、六は雜蔵（三乘人天修因証果等法）、七は金剛蔵（金剛心菩薩所得法）、八は仏蔵（仏所得内証外用法）。

二に小乗。

### 小乗即於止雜慥度也

（小乗はすなはち四含のなかにおいて雜含を立つ。まさに知るべし、三含はこれ純、一含はこれ雜なり。律にはすなはち二十の慥度を立ててもつて戒行を明かす。そのなかに前の十九はこれ純、後の一は雜慥度なり。論（八慥度論）にはすなはち八慥度を立てて諸法の性相を明かす。前の七慥度はこれ純、後の一はこれ雜慥度なり。）

「四含」とは、増一（五十卷。曇摩難提訳）は人天因果を明かす。長（二十二卷。仏陀耶舎共竺仏念訳）は邪見を破す。中（六十卷。毘曇の僧伽提婆訳）は深義を明かす。雜（五十卷。求那跋陀多羅訳）は諸禅法を明かす。述記四本（三十六左）に云く、

一法より増して百法に至るを明かすに、増一と名く。略せず広せず義を明かすに、中と名く。もし事義を明かさば文広にして長と曰く。[428a] 雜雜に事を明かすに名づけて雜となす。

等と。

「律」は四分律（六十卷。仏陀耶舎竺仏念と共に訳す）を指す。

「二十慥度」（これを法聚と云う）とは、一は受戒（三十一已下に明かす）、二に二は説戒（三十五已下に明す）、三は安居（三十七已下に明す）、四は自恣（三十七後半已下に明す）、五は皮革（三十五已下に明す）、六は衣（三

十八已下に明す)、七は藥(三十九末半已下に明す)、八は迦絺那衣(三十  
五已下に明す)、九は拘睭弥(四十二に明す)、十は瞻婆(四十三中に明す)、  
十一は訶責(四十三末半に明す)、十二は人(四十五末半に明す)、十三は  
覆藏(四十六中に明す)、十四は遮(四十六中に明す)、十五は破僧(四十  
六末半に明す)、十六は滅諍(四十八初に明す)、十七は尼(四十八中より  
至りて四十九に明す)、十八は法(四十九後半)、十九は房舎(五十四五十  
一に明す)、二十は雜(五十一に明す)。論には八韃度を指す。論にはまた  
『發智論』(二十卷)を云う。迦多衍尼子造(玄奘訳)。

「八韃度」とは、業使智定根大見雜これなり。

### 三に僧伝

## 賢聖集中止雜科也

(賢聖集のなか、唐・宋兩伝には十科の法を立てて高僧の行徳を明かす。そ  
のなかに前の九はこれ純、後の一はこれ雜科なり。)

「唐」とは、『続僧伝』(四十卷。南山の道宣作)。

「宋」とは、『宋僧伝』(三十卷。讚贊智論同撰)。

「十科」とは、訳経、義解、習禪、明律、護法、感応、読誦、遺身、興福、  
雜貨これなり。

### 四に義章

## 乃至大乘止是雜聚也

(乃至、『大乘義章』に五聚の法門あり。前の四聚はこれ純、後の一はこれ  
雜聚なり。)

『大乘義章』とは(二十卷)、淨影慧遠の撰。

「有五」等とは、教義染淨雜これなり。

### 二に密教

[428b]

## 亦非頭教<sup>止</sup>一首是雜

（また頭教のみにあらず。密教のなかに純雜の法あり。いはく山家の『仏法の血脈の譜』にはく、一には胎藏界の曼陀羅の血脈の譜一首、二には金剛界の曼陀羅の血脈の譜一首、三には雜曼陀羅の血脈の譜一首。前の二首はこれ純、後の一首はこれ雜なり。）

「仏法の血脈の譜」とは、あるいは（要義）云く、「一卷、伝教大師作」と。あるいは評して云く、「**釈書（※元亨釈書…日本初の仏教通史）**またしかなり」と。しかれども譜中には伝教伝を載して称嘆して至るか。これに由つてこれを観ずるに、伝教の作にあらず。さらに案ずれば伝教は義真と同じく入唐し、同じ国清寺の邃和尚に謁し、同じく宗脈を受く（桓武帝延暦二十三年は大唐貞元二十年に当る）。恐らく義真の作か。

「一胎」等とは、胎は含藏の義。母体内に身体を含藏して、これを覆育するがごとし。すなわち衆生所具の理性を詮す。諸仏はこれを託して化他の大悲を起す。理法身なり。

「二金」等とは、金剛に二義あり。一は堅固、二は利用。すなわち如来の内証の智体を顕すなり。余文は解すべし。

## 二に結示

## 純雜之義<sup>止</sup>論純雜也

（純雜の義多しといへども、いま略して小分を挙ぐるのみ。まさに知るべし、純雜の義、法に随ひて不定なり。これによりていま善導和尚の意、しばらく浄土の行において純雜を論ずるなり。）

文意解すべし。

## 二に外典

## 此純雜義<sup>止</sup>不出矣

（この純雜の義内典のみに局らず、外典のなかにその例はなはだ多し。繁きことを恐れて出さず。）

礼には『雜記』あり。易には『雜卦』あり。漢書には雜流あり。莊子には雜篇ある等なり。また東方の和歌選集には雜部ある等なり。

二に例を示す

### 但於往生<sup>止</sup>行者<sup>止</sup>思之

(ただし往生の行において二行を分つこと、善導一師のみに限らず。もし道綽禪師の意によらば、往生の行多しといへども束ねて二となす。一にはいはく念仏往生、二にはいはく万行往生なり。もし懷感禪師の意によらば、往生の行多しといへども束ねて二となす。一にはいはく念仏往生、二にはいはく諸行往生なり。「恵心(源信)これに同じ。」かくのごときの三師、おのの二行を立てて往生の行を撰す。はなはだその旨を得。自余の諸師はしからず。行者これを思ふべし。)

「若依道綽」等とは、『安樂集』下に云く、

『觀經』および余の諸部によるに、所修の万行ただよく回顧して [429a] みな生ぜざるはなし。しかるに念仏の一門、もつて要路となす。

(註釈版七祖篇二五〇)

「若依懷感」等とは、『群疑論』五に云く、

また諸行を修して西方に往生す。聖言ありといえども、經文の説少なし。念仏して往生を得るは、その教え極めて多し。

「慧心」等とは、化土本(十六紙)に云く、

おほよそ浄土の一切諸行において、綽和尚(道綽)は「万行」(安樂集・下)といひ、導和尚(善導)は「雜行」(散善義)と称す。感禪師(懷感)は「諸行」(群疑論)といへり。信和尚(源信)は感師により、空聖人(源空)は導和尚によりたまふ。  
(註釈版三九六)

今の文を承くるなり。

二に重ねて得失を判ずるに二。初に引文、二に私釈。初の引文に三。初は法に就いて正示す。二に見聞を挙げて示す。三に行者に勧励す。初の法に就いて正示すに二。初は専修の四徳を明かす。二は雑修の衆失を明かす。今は初

### 往生礼讚<sup>止</sup>随順仏語故

（『往生礼讚』にはく、「もしよく上のごとく念々相續して、畢命を期となすものは、十はすなはち十ながら生じ、百はすなはち百ながら生ず。なにもつてのゆゑに。外の雑縁なく正念を得るがゆゑに。仏の本願と相応するがゆゑに。教に違せざるがゆゑに。仏語に随順するがゆゑに。」）

問う。今章の二段、何ぞ前後と異なるや。

答う。第一・第二は楷梯、第三は慇懃の勸励。時衆をして堂に昇り室に入らしめんと欲す。老婆心の切なるものなり。

如上の言は三心等を承く。

「念念」等とは、無間修を挙ぐ。

「畢命」等とは、長時修を挙ぐ。終を挙げて始を撰めるのみ。

「十即」等とは、願に「若不生者」と云う。経には「即得往生」と云う。

「何以故」とは徴なり。

「無外」等とは、いわゆる専修の四徳これなり。

第一には、利他の信樂を得て雑縁なきことを明かす故に正念を得る。正念を得るが故に雑縁なし。

第二には、本願と相応することを明かす。すなわち大経に順ずるなり。

第三には、仏教と相応することを明かす。すなわち觀経に順ずるなり。

第四には、仏語と相応することを明かす。すなわち小経に順ずるなり。

三経の三仏、いわゆる三部鼎峙<sup>ていし</sup>のものなり。

[429b]二に雑修の衆失を明かすに二。初は上の四得に反す。二に上の余意を説く。今は初。

## 若欲捨專<sub>止</sub>不順仏語故

(もし專を捨てて雑業を修せんと欲するものは、百の時に希に一二を得、千の時に希に五三を得。なにをもつてのゆゑに。雑縁乱動して正念を失ふによるがゆゑに。仏の本願と相応せざるがゆゑに。教と相違するがゆゑに。仏語に順ぜざるがゆゑに。)

初の四は体となす。次の九相は用。四徳はすでに反して今の四失を成す。九失はまた反してまさに九徳を成すべし。十三の徳失。理に存じて知るべし。体用の差、下の分別のごとし。

二に上の余意を説く。

## 係念不相<sub>止</sub>往生正行故

(係念相續せざるがゆゑに。憶想間断するがゆゑに。回顧慙重真実ならざるがゆゑに。貪・瞋・諸見の煩惱来りて間断するがゆゑに。慚愧・悔過あることなきがゆゑに。また相續してかの仏の恩を報ぜんと念はざるがゆゑに。心に輕慢を生じて、業行をなすといへどもつねに名利と相応するがゆゑに。人我おのづから覆ひて同行善知識に親近せざるがゆゑに。樂ひて雑縁に近づきて、往生の正行を自障障他するがゆゑなり。)

「係念」等とは、『六要』の六(新末三紙)に云く、

問。第五の失に「係念」等と云ひ、第六の失に「憶想」等と云ふ、何の差別か有る。答。「係念」等とは是れ初心に約す、「憶想」等とは後心に約する也。  
(二一・三九五)

もし性相に依らば、明記を念と云い、取像を想と云う。『六要』とその義相反するに似たり。私の按ずるに、成実、心の作発を念数となす。別に憶数を立てて不忘の義となす。今と符号せり。凡そ成実の中、信を必定と等しとなす。今家と合するもの枚挙すべからず。

「憶想」等とは、上に准じて解すべし。無間・長時の二修の反なり。無間



間対はこれに借りて弁立す。

「回顧」等とは、もし性相に依らば、これ欲数なり。恭敬の反なり。

「貪瞋」とは利鈍を並挙す。「貪」等は鈍使。「諸見」は利使。自力の輩のごとし。たとい遺除すること頭燃を救うがごとくすれども、百千間をいかにせん。

「無慚」等とは、慚愧とは『涅槃經』（北本十一（十五）南本十（二十八）信卷所引）の現病品に云く、

慚はみづから罪を作らず、愧は他を教へてなさしめず。慚は内にみづから羞[430a]恥す、愧は発露して人に向かふ。慚は人に羞づ、愧は天に羞づ。これを慚愧と名づく。無慚愧は名づけて人とせず、名づけて畜生とす。慚愧あるがゆゑに、すなはちよく父母・師長を恭敬す

（註釈版二七五）

等と。

『唯識』七に云く、

無慚とは、謂く自法を顧みず、賢善を輕扼するを性となす。よく暫を障礙し悪行を生長するを業となす。無愧とは、謂く世間を顧みず、暴悪を崇重するを性となす。よく愧を障礙し悪行を生長するを業となす（涅槃文の第二義と合す）。

『俱舍』の根品に云く、「無慚愧は重からず。罪において怖れを見ず」（義はまた略して同じ）。

雑修の人は自ら己の功を恃むが故に慚愧なし。

「悔過」とは、『涅槃經』の次上の文に云く、

耆婆答へていはく、へ善いかな善いかな、王悪心を作るといへども（※  
原本…罪をなすといへども、心に）重悔を生じて慚愧を懐けり。

（註釈版二七五）

すなわち今の意なり。成実の意に准ず。前失は十使、今失は十纏と知るべし。

「又不」等とは、この失殊に重きが故に「又言」を置く。また可なり。前の二は恭に反し、今の一はこれ次の二を与え、敬に反するが故に「又言」を

置く。和讃に雑修の衆失を示して云々。これは一心と念報の二を取るのみ。今承る相承はこの一の著に在ること知らざるべからず。旨を得て領会す。

「心生」等とは、「輕慢」とは『法界次第』に云く、

自ら恃み他を輕んじるの心を慢と曰う

他を輕蔑することすなわち慢相なり。七慢九慢は俱舍の第十等のごとし。

「雖作」等とは、法を敬わざるなり。前後の三失は三宝を敬わず。次のごとく知るべし。

「常与」等とは、「名」は謂く名聞、「利」は謂く利養。法宝を貴ばず名利の具をなすのみ。

問う。高祖すでに「迷惑名利」等と云う。いかんがこれと会す。

答う。すでに云く「悲しきかな」、また云く「耻ずべし傷むべし」等と。あに名利と相応すべきかな。

〔430b〕「人我」等とは、「覆」は覆藏。自他平等これを正見となす。今すなわち人我の確執、己の非を覆藏し、謙虚を修せず。

「不親」等（同行善知識に親近せざる）とは、上（法界次第か）の第四に三種の善知識を明かすを視る。外護・同行・教授これなり。今すなわち総別並べて称するのみ。

「樂近」等とは、問う、第一の失と何ぞ異なる。

答う。これ二異あり。一は雜縁彼此異。謂く彼はすなわち自彼を縁じ、此はすなわち自此を縁ず。二は自損損他異。謂く彼はすなわち失するに自損に止まり、此はすなわち過ぎて自他を兼ねる。これを異となすのみ。

問う。十三失は生起あるやいなや。

答う。深意測り難し。試みに三門を作る。一は体用に約し、二は四修に約し、三は二信に約す。

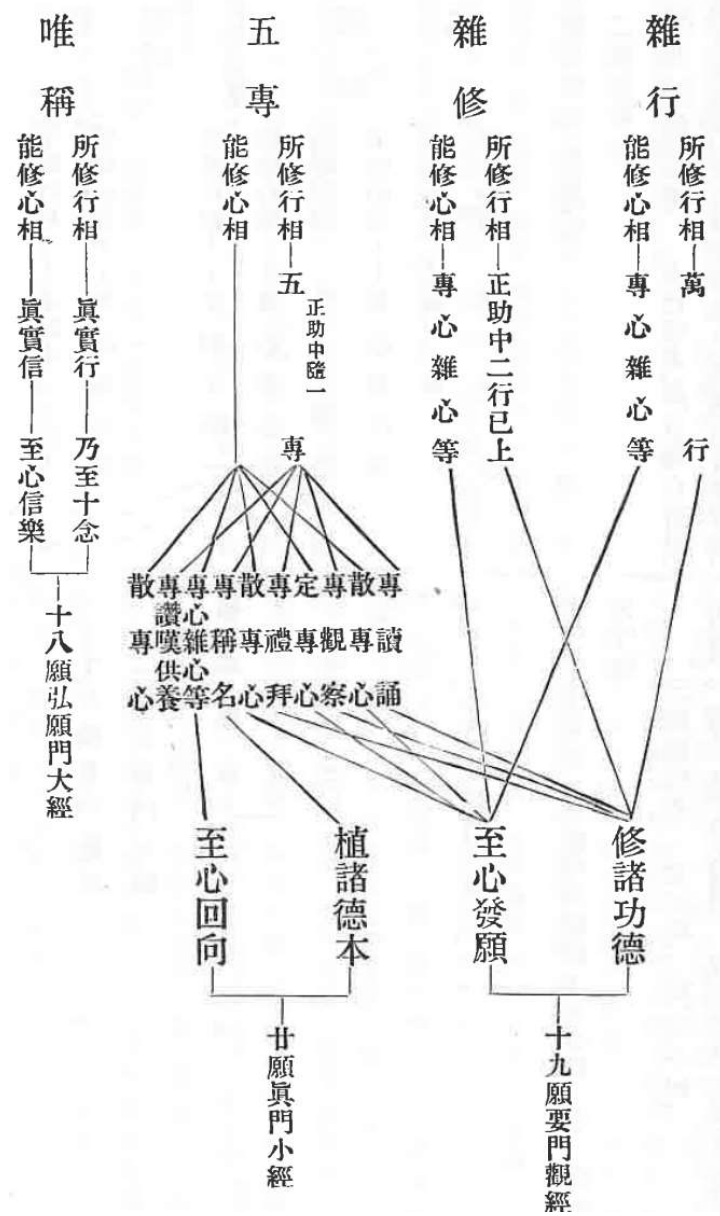
初の体用に約すは、初の四は体となし、五六は相となし、七已下は用となす。

二の四修に約すは、初後の二失は無余修に反す。一心正念これ無余故に。二三四の失は恭敬修に反す。第五は無余修に反す。第六は長時修に反す。第七は総じて恭敬修に反す。第八及び九は別して恭字に反す。第十及び第十二は別して敬字に反す。

三の二信に反すとは、初後の二失は、総じて二信に反す。第二三四は別し

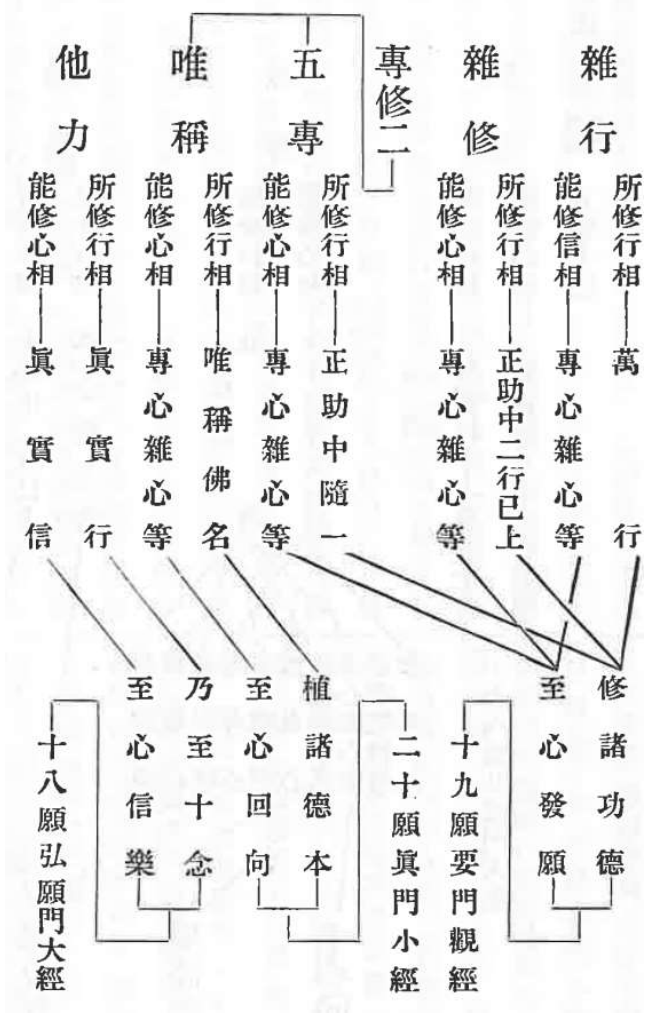
て信法に反す。第五より十二に至るは、別して信機に反す。問う。雑行雑修の同異いかん。答う。図をもって点示せば、四双八隻を具す。条理井然せいぜん（陳善院等諸老の説）。

[431a]



更に一師（淡谷老師）に依らば、五双十隻。

[432a]



右の二説殿最知り難し。来哲これを扱す。

二に見聞を挙げて示す

### 何以故<sub>止</sub>如前已弁

(なにをもつてのゆゑに。余、このごろみづから諸方の道俗を見聞するに、解行不同なり、専雜異あり。ただ意をもつばらになすものは、十はすなはち十生ず。雜を修して心を至さざるものは、千がなかに一もなし。この二行の得失、前にすでに弁ずるがごとし。)

「余比」等とは、触目皆是と言うがごとし。「見聞」とは、近見遠聞。「解行」とは、開解立行。「専雜」とは、若專若雜。

[432b]「但使」已下、親しく專雜の得失を結示す。「雜修不至心」はすなわち二名一義なり。余文解すべし。

三に行者に勸励するに二。初は正修。二は由を説く。今は初。

### 仰願一切<sub>止</sub>畢命為期

(仰ぎ願はくは一切の往生人等、よくみづからおのれが能を思量せよ。今身にかの国に生ぜんと願ぜば、行住坐臥にかならずすべからく心を励まし、おのれを剋して昼夜に廢することなかるべし。畢命を期となせ。)

「仰願」等とは、述懐して見るべし。「思[433a]量己能」とは、信機を示すなり。

「行住」等とは、威儀を問わざるが故に。「必須」等とは、念報の経営、信後の妙行なり。

二に由を説く。

### 上在一形<sub>止</sub>快哉応知

(まさしく一形にありて少苦に似たれども、前念に命終して後念にすなはちかの国に生じて、長時永劫につねに無為の諸樂を受く。乃至成仏まで生死

を経ず。あに快きにあらずや。知るべし」と。

「上在」等とは、経に云く、「一世に勤苦すといへども」（註釈版六一）等の意なり。

「前念」等とは、経に云く、「すなわち往生を得て、不退転に住す」、これなり。

「長時」等とは、広故に長時、略故に一時。相入故に平等。莊嚴の時に前後なし。「乃至成仏」はまたこの旨なり。余文解すべし。

二に私釈

### 私云見此止能思量之

（わたくしにいはいく、この文を見るに、いよいよすべからく雑を捨てて専を修すべし。あに百即百生の専修正行を捨てて、堅く千中無一の雑修雑行を執せんや。行者よくこれを思量せよ。）

文意見るべし。専修の正行、雑修の雑行、みな名号においては定散対のみ。今家の判のごときは、他力の極致を集成し翼讚して余蘊なきものなり。上の図示のごとし。得失の通局は、金声玉振にして、実に感戴すべし。

・言葉の補足説明は、（※〜）

・言葉の補筆は、「※〜」

・引文に省略がある場合は、（※省略…）

・引文が原本と異なる場合、（※原本…）

・省略記号

真聖全…真宗聖教全書

註釈版…浄土真宗聖典註釈版

浄真全…浄土真宗全書

【科段③（随文釈）】

二に二行章

標章

引文

正しく二行を明かす

正引

標 積

正行

総じて正行を明かす

標

徴

列

助正を分別す

雜行

得失

私積

積文

總分

別積

往生の行相

二種を標す

二種を積す

正行

開合を標す

開合を積す

開

標 積

開中合

開中開

結

---



---

小乗 大乘  
 頭教  
 正挙  
 内典  
 積標  
 正積  
 正業  
 助業  
 重積正業  
 純雑対  
 回向不回向対  
 有間無間対  
 親疎対  
 近遠対  
 義に就いて広判す  
 積標  
 二行の得失  
 文を挙げ略示す  
 余を撰す  
 分積  
 数を示す  
 体を示す  
 廣積  
 略積  
 文を挙ぐ  
 雜行  
 積標  
 合

重ねて得失を判ず

示例

引文

法に就いて正示

専修の四徳を明かす

雑修の衆失を明かす

上の四得に反す

上の余意を説く。

見聞を挙げて示す

行者に勸励す

正修

由を説く

私釈

僧伝

義章

密教

結示

外典